

# ドイツ啓蒙主義歴史学研究（I—4）

## —Johann Christoph Gatterer とエジプト史の問題—

岡崎勝世

### 目次

- 一. はじめに
- 二. 「普遍史」とエジプト史の問題
  - (1). 「普遍史」の発生とエジプト史
  - (2). 「普遍史」の危機とエジプト史
- 三. 十七・八世紀におけるエジプト史研究
  - (1). エジプト史研究の状況
  - (2). ニュートンのエジプト論
- 四. ガッターラーの四種類のエジプト史叙述
  - (1). 『普遍史教科書』(1860)
  - (2). 『普遍史序説』(1771)
  - (3). 『世界史』(1785)
  - (4). 『世界史試論』(1792)
- 五. 小結

### 一. はじめに

筆者は、すでにドイツ啓蒙主義歴史学を代表する一人であるガッターラーの世界史叙述を巡り、三編の論考を発表してきた<sup>1)</sup>。本稿の目的はガッターラーのエジプト史論を検討することであるが、これについても、既に発表した論考で、そのテーマにかかわる限りで概略に触れたことがある<sup>2)</sup>。単純化して言えば、エジプト史の「古さ」の問題がヨーロッパの伝統的世界史叙述である「普遍史」の危機の一原因となったということである。そしてドイツにおける「普遍史」はその危機の中で18世紀中に崩壊していき、19世紀からは新たな歴史学の歩みが始まるということである。本稿で改めてこの問題に取り組むのは、そこで述べたことはあくまで概略に過ぎず、それ自体独自の問題圏を構成しているこの

テーマについて、十分な論証と考察が行われていなかったからである。そこで本稿では、エジプト史と「普遍史」との関係について立ち入って考察し、また18世紀におけるエジプト史研究の一つの典型としてガッターラーのそれを検討したい。その検討は、また、エジプト史研究自身も「普遍史」の崩壊とともに大きな転換を遂げることを示すことになるであろう。

### 二. 「普遍史」とエジプト史の問題

本章ではエジプト史が「普遍史」との間に有していた緊張関係を、二つの時期に分けて見ることにしたい。まず第1期は「普遍史」の発生からルネサンスまでである。第2期はルネサンス以後、16世紀から18世紀にいたる、いわゆる「年代学論争」の時代である。エジプト史の「古さ」が深刻な問題となるのはこの第2期であるが、第1期においてもそれは決して軽んじられていたのではなかった。ただ別の重要な問題に意識が向かっていたために、表面化しなかっただけである。こうした諸点について以下で見よう。

#### (1) 「普遍史」の発生とエジプト史

キリスト教的世界史叙述である「普遍史」が発生するのは、古代ローマにおいてである。それは大ざっぱに言えば、「キリスト教年代学の父」ユリウス・アフリカヌス(170頃～240頃)を出発点とし、「教会史の父」エウセビオス(260

頃～339) とヒエロニムス (?～419?) がこれを発展させて基礎を築いた。またアウグスティヌス (354～430) とオロシウス (390頃～?) も、これに無視できない貢献を行っている。そしてこれらの古代ローマにおける成果は概ねそのままヨーロッパ中世に継承されていった。そこで本節では、これらの人々によって成立してくるキリスト教年代学と「普遍史」の内容を概観し、そこにおいてエジプト史がどのような位置を占めているかを見、次いでそれが中世にどのように引き継がれるかを見ることにしたい。

さてキリスト教徒による年代学と「普遍史」は、キリスト教徒がローマ世界に対して行った、キリスト教弁護の活動の中で発生した。バターフィールドによれば<sup>3)</sup>、キリスト教の教父たちがとりわけその中で重視した問題が2点あった。まず第1は、キリスト教は最近始められたばかりの新興宗教であるとの異教徒たちからの批判の問題である。これに対してキリスト教徒は、旧約聖書の教えとの連続性を示すことでその「古さ」と正統性を主張することになった。ところがここから第2の問題が発生する。それは、ユダヤ教との違いをその上で説明しなければならないという問題である。

アフリカヌスが『年代誌』(212～221) で取り組んだのは、二つの問題のうち「連続性の問題」、すなわちキリスト教の「古さ」の論証であった<sup>4)</sup>。もちろんそこでは、キリスト教徒においては旧約聖書が聖典の一つであること、そしてその聖典には天地創造以後の全人類の歴史が叙述されていること、この2点を異教徒たちに示すということが目指されるわけである。ギリシア人やローマ人の宗教とは違い、キリスト教が最も「古い」宗教であること、それだけでなくローマ人の歴史もキリスト教の神の摂理に組み込まれていること、従ってキリスト教の神こそが真の神であることを論証し、それによってロー

マ人に迫害をやめるよう、説得しようとしたのである。

それではアフリカヌスは具体的にどのような年代学を展開したのであろうか。彼の作品は断片でしか伝えられていないが、フィネガンに依りながら以下で簡単に見ておくことにしよう<sup>5)</sup>。アフリカヌスはその年代学をアダムの創造を紀元とし、「アダムより」何年という表現をしている。すなわち『七十人訳聖書』に基づいた創世紀元によって年号を記し、それによって世界史上の諸事件の年代決定の試みを行った<sup>6)</sup>。そうした年号のなかで本稿との関係でまず重要なものは、出エジプトの3707年という年号である。というのは、彼はこの事件がエジプト第18王朝初代のアモシス王の時代に発生したと言い、またギリシアの伝説にあるオーギュグスの洪水も、同時代の出来事であるとしているからである。また第1回オリンピアドは4727年とされ、これ以後はオリンピアドによる年代と創世紀元の年号が併用されていく。イエス生誕年についてはアダム紀元5500年＝第194オリンピアド第2年と計算されている(キリスト紀元に換算すると前2年)。

かかる彼の年代学は、同時にまた「普遍史」の出発点となった。そこでは、もちろん旧約聖書に基づきながら、しかし旧約聖書には欠けている部分について重要な補充を行いつつ、世界史が語られているからである。旧約聖書には、アダム以後の初期の人類の歴史や、ノアの大洪水以後の諸民族の発生が語られており、次いでイスラエルの民の歴史と他の諸民族の歴史を結合しながら、その後の歴史が叙述されている。「創世記」の10、11章には「民族表」と呼ばれるセム、ハム、ヤベテの子孫が列挙されている場所があるが、ここではアッシリア人やエジプト人はじめアジア、アフリカ、ヨーロッパの諸民族が、ノアの息子たちの子孫として位置づけ



られている。従って、とりわけ「創世記」の最古の人類史叙述の部分には、ローマ人が知っていた諸民族の大部分を包摂した世界史が記述されていることになる。ただし、二つの重要な民族を除けば、であるが。

その二つの民族とは、ギリシア人とローマ人に他ならない。周知のように、ギリシア人とローマ人の歴史は聖書には書かれていないからである<sup>7)</sup>。しかもアフリカヌスが相手としているのは、まさにそのギリシア人やローマ人であった。そして、上にあげたモーセとオーギュグスの洪水が同時代だとしているアフリカヌスの記述は、実はこうしたギリシア史をキリスト教的な世界史叙述に取り込む試みだったのである。というのは、オーギュグスはギリシアのテーベ初代の王とされる伝説的王であった。従ってこれにより、ギリシア史の全体がキリスト教年代学によって包摂されることになる。さらにローマの建国はローマ人ウォルロ自身が第6オリンピック第3年4月21日としたのであるから、その歴史ははるかに新しい。これも聖書に基づく年代学の体系に容易に組み込まれることになる。このようにしてアフリカヌスは、彼が生きた当時の「世界」を構成していた諸民族の歴史を、旧約聖書の描く歴史に結びつけた。というより、旧約聖書によれば全ての民族の歴史を包摂する歴史を描けるということを示し、それによってローマ人にキリスト教の「古さ」を論証することこそが、彼の最終目的だったのである。そしてこの目的を追求する以上、年代学は必然的に世界史叙述を伴わなければならないのであつた。アフリカヌスの年代学が同時に「普遍史」の出発点となつたのは、かかる理由によるものであつた。

ローマ時代のキリスト教年代学のなかで、とりわけ西ヨーロッパに対して最も大きな影響を

与えたのは、エウセビオスとヒエロニムスの年代学であつた。エウセビオスには『年代記』という作品があり、ここではアフリカヌスの著作を基にしなが、彼の年代学研究が行われていた。しかし、ギリシア語で記されたこの著作は現在では失われており、ヒエロニムスによるラテン語訳と、アルメニア語訳の形で今日に伝えられている<sup>8)</sup>。ヒエロニムスは本書のなかの「年表(カノン)」部分を翻訳し、その際に一部を補充したのだが、前川貞二郎氏によれば、「このエウセビオス=ヒエロニムスによる『年表』が、ローマ教会によって権威あるキリスト教(聖書)クロノロジーとして公認され、その後長くキリスト教世界史像のバックボーン、あるいは枠組』となつたのである<sup>9)</sup>。

それではエウセビオスの『年代記』はどのような内容を有していたのであろうか。アルメニア語訳の『年代記』には、ラテン語訳のそれがない各国史的記述がある。これを第1部と呼ぶと、本書はこれに第2部を加え、全体が2部構成となつていたようである。第1部は「カルデア人」、「ヘブライ人」、「エジプト人」、「ギリシア人」、「ローマ人」の諸項目からなつている。各項目では他の歴史書からの抜粋などによつておのおの歴史がたどられ、それと聖書の歴史記述とが比較検討されている。第2部は「カノン」と題され、「アブラハム紀元(Ab Abraham)」の年号を共通の時間軸とし、第1部で扱われた各民族と諸国家の並存関係を、諸王の在位年数を示しつつ一年刻みの詳細な年表にまとめている(表-1参照)<sup>10)</sup>。

エジプト史に係わる項目を見ると、アブラハム時代に第16王朝が置かれている。表で見られるように、カルデア人(アッシリア人)やギリシア人などの歴史が、アブラハム以後のヘブライ人の歴史=旧約聖書の歴史叙述の枠組の範囲内に収まっているのに対し、エジプト人のみは

第15王朝までがその枠からはみ出している。そしてエジプトの第1王朝がどこに位置するのかについては、この年表からは出てこない。それではこの年表に出てこない部分は、エウセビオスが前提としている旧約聖書に基づく年代学全体の中で、一体どのように位置づけられるのだろうか。エジプト史のこのような「古さ」が、聖書の示す時間的枠組に矛盾なく収まるのであろうか。この問題は、すぐに詳しく見るように、大変な難問であった。他方でこの問題はまた、もうまく解決できれば、聖書に基づく年代学の説得力を極めて大きなものとするにもなる問題であった。アフリカヌスの年代学ではノアの大洪水からイエス生誕まではおよそ3238年間、またエウセビオスの年代学ではそれは2957年間とされており、エジプトの第1王朝からの歴史を、エウセビオスの年代学がこの時間的枠組にうまく組み込むことができれば、もはや旧約聖書の示す時間的枠組を脅かす歴史は他に存在しなくなることになるからである。そして聖書のみが全人類の歴史包摂した歴史を与えていることになるからである。しかし問題は簡単には解決できる性質のものではなかった。というのは、第1王朝からの歴史そのものが極めて長大なものであっただけでなく、エジプト人はこの第1王朝の以前に、さらにもっと長いエジプト人の歴史があったことを主張していたからである。こうしてエウセビオスは、このエジプト史の古さの問題に真剣に取り組まなければならなくなった。その取り組みにあたり、彼が研究したのはマネトの『エジプト誌』<sup>11)</sup>であった。そこで本稿では、マネトの記述にも立ちかえりながら、この問題を詳しく見ていくことにしたい。

アフリカヌスの残した断片によれば、マネトの第1王朝の記述冒頭は、以下のように書かれていた。「死者の霊たちに続くのは、8名からなる最初の王朝である。その初代、ティスのメネ

スは62年間統治した。彼はカバによって連れ去られて姿を消した。」<sup>12)</sup>この文章からわかることは、マネトが最初の王朝の前に「死者の霊」の時代を置いているということである。エウセビオスが本書で真っ先に取り組むのが、この死者の霊、さらには半神たちや神々の統治した時代の問題である。というのは、エウセビオスが伝えてくれるところによると、マネトは人間が統治する以前に最初神々の統治した時代が13,900年間あり、それから半神たち、次いで死者の霊が支配する時代が合計で約11,000年間、合計して24,900年間あったとしていたのである<sup>13)</sup>。この後に人間が統治する時代がメネスから開始されるが、マネトは、これら31の王朝がその数値の示す順序で次々にエジプト全土を統治したと考え、王の名や王朝の存続年数を添えて記述しているのである。では31の王朝の年代を合計するとどうなるであろうか。まず、アフリカヌスのマネト研究からは5371年と70日、またエウセビオスの本書からは、5268年と8ヶ月という数値が出てくるのである<sup>14)</sup>。これはアレクサンドロス大王がエジプトを征服し世界支配権をペルシアから奪ったと計算されている、前331年までの年数である。つまり、アフリカヌスはイエス生誕を創世紀元5500年、ヒエロニムスは5199年としているのだから、マネトの記述が正しいとすれば、メネスは天地創造以前に既にエジプトを統治していたことになるわけである。しかもさらにエジプト人は、メネス以前に遙かに長期にわたる神々の統治した時代を置いているのである。

もともとマネトを研究した点ではキリスト教徒よりもユダヤ人が先であった。ヨセフスはじめユダヤ人たちは、ユダヤ人の歴史の古さを強調することで、彼らを弾圧したローマ人を説得するという戦術をとった。その一環として、エジプトとの関係でユダヤ人の歴史の古さを実証



しようとし、マネトを研究したのである。ヨセフスは『アピオンに対する反論』のなかで、マネトの記すヒュクソス時代を「創世記」のヨセフからモーセに至るイスラエルの民のエジプト時代に重ね、彼らは第18王朝初代アモシスのときにエジプトを脱出したとしている。そしてその上で、マネトからわかることとして、「第1点はわれわれがどこかからエジプトにやって来たこと、第2にわれわれのエジプトからの移住が極めて古いきごとであり、トロヤ戦争よりほぼ1000年も古いといいうことである。」と述べている<sup>15)</sup>。この文章でヨセフスが最も言いたかったのは、ユダヤ人のほうが、ローマ人はもとより、ギリシア人より遙かに古い民族であるということであった。そして、こうしたユダヤ人たちのエジプト研究をキリスト教徒たちが受け継いだのも、やはり同じ目的からであった。実際「出エジプト」について、アフリカヌスはヨセフス同様第18王朝初代のアモシスのときとしている<sup>16)</sup>。そしてエウセビオスは、「カノン」で、同王朝第9代のケンケレス第16年のこととしている<sup>17)</sup>。

だが、もしヨセフスたちユダヤ人や、またキリスト教徒たちの議論が正しいとしても、この議論は大きな危険性をはらんでいると言わねばならない。というのは、上でも紹介したように、マネト自身はそのユダヤ人よりも遙かにエジプト人が古い歴史を持っていることを主張していたからである。このエジプト人の「古さ」の問題についてアフリカヌスがどのように考えていたかは、はっきりしない。だがエウセビオスにとってはこの問題は極めて重要な問題となっていた。この問題のうち、まず最初に置かれている神々などの統治した時代の問題に関しては、エウセビオスは次のような解決策を提案している。すなわち彼によれば、エジプト人の暦は過去とマネトの時代とは大きく異なっていたの

であり、エジプト人が神々の時代としている時代には、「われわれが『月』と呼ぶところを『年』として使用し」、また半神以後の時代は「3ヶ月」が「年」と呼ばれていたと考えるのである<sup>18)</sup>。その上で、彼は神々の支配した13,900年間と、半神や死者の霊が支配した11,000年間とをこの基準によって「年」に換算し、合計2206年という数値を得る。そして大洪水の創世紀元による年号2242年と比較し、その数値の範囲内に収まることを確認する。つまり、エジプト人が神々などの統治した時代としている期間は、ノアの洪水以前の時代に対応するというのである。そしてこの結果、エウセビオスは「創生記」にあるとおり、「ミツライムこそが実際にエジプト人の王朝の祖となった人なのである」<sup>19)</sup>と結論する。こうして彼はまず第1の関門を乗り越えた。強引だが神代のエジプト史を聖書のノア以前の歴史記述の枠内におさめたからである。

この議論で、神々や死者の霊、半神たちの時代については問題が解決されたとしよう。しかし、もし仮にこの議論が正しいとしても、なおメネス以後の年代の超過分はどう処理すればよいのであろうか。先にも示したように、エウセビオスの利用したマネトの要約ではメネス以後アレクサンドロスまでは約5268年、従ってメネス以後イエスまでは約5600年間と計算され、これでは先に述べたノアからイエスまでの2957年間に比して2600年近くも年数が過剰になってしまうからである。この第2の難問への回答は、直接には神代についての議論の中で述べた次の立場を、このメネス以後の時代にまで拡張するほかなかったであろう。すなわち「なお年数が過剰であるとすれば、多分何人も王たちが同時に統治していたと考えなければならない。」<sup>20)</sup>ということになる。

マネトは各王朝について常にその首都の場所を明記していた。メネス以後の時代で首都が置

かれた都市は、おおむねメンフィス、ティス(ティニス)それにディオスポリス(テーベ)である。したがって、彼はマネトのエジプト史を三地域に王国が鼎立していたか、または南北に二つの王朝が並存していたという形で再編することで、年号の短縮が可能と暗示したことになる。これは確かに「案」としては面白いし、また可能性も否定できない一案である。今日では、実際に「三国時代」や「南北時代」が何度かあったとされてもいる。とはいえエウセビオスはこの考えをメネス以後の諸王朝について適用して具体的に議論をしているわけではない。「カノン」の年表ではアブラハム時代に第16王朝が存在したとしたうえで、表に見られる通り、以後は全ての王朝をマネトと同じように順に配置している。だが問題はこれ以前の時代をどのように考えるかである。すなわちこれ以前について「三国時代」や「南北朝時代」を設定して、聖書のミツライム以後の年代にうまく収まるかどうかということこそ問題である。というのはメネスから第15王朝滅亡までに、マネトによれば既に3732年が経過しており、これは聖書によるノアからアブラハムまでの942年間とは、まるでかけはなれた年数となっているからである。つまり何よりもエウセビオスは第16王朝開始までのエジプト史を、上の原則で聖書の年代の枠組にはめこむことに取り組まなければならなかったはずなのである。それを行わないかぎり、本当はエジプト人はミツライムの子孫であるとは言えないはずなのである。しかし残念ながら本書ではその作業は行われていない。ということは結局、微妙な形で解決策が暗示されたまま、エジプト史の古さの問題の解決は後世に委ねられていると言わねばならないであろう。実際、マネトが復活した1598年以後、ヨーロッパ人はこの問題で大変悩むことになる。だがそれについては後に述べることにしよう。

アウグスティヌスも、『神の国』でやはりエジプト史の問題に取り組んでいる。ただ彼は、ローマの作家マルクス・ワルロの『ローマ人の種族について』によりながら議論を進めるという方法をとった。ワルロは古い時代の基点としてギリシア最古の王国とされるシキュオンから始め、アテネ人の歴史へと進み、さらにラテン人、ローマ人の歴史へと叙述を進めていた。ワルロを利用した点ではエウセビオスも同様であるが、しかしアウグスティヌスはマネトは検討していない。こうしたことから、結果的にはアウグスティヌスはワルロと同じく、ギリシアの側からエジプト史を見ることになった。例えば彼は、アルゴス王国を開いたイーナコスの娘イオがエジプトに渡り女神イシスとされたというギリシア人の伝承<sup>21)</sup>、アルゴス第3代国王アピスがエジプトに渡り、セラピス神として崇められたという伝承を、ワルロとともにそのまま受け入れている<sup>22)</sup>。アルゴス王アピスは、アッシリア第10代目の王パレウス、シキュオン第9代目の王メサップス、ヘブライ人の族長イサクの同時代人とされているから<sup>23)</sup>、つまり、エジプト人が神と崇めているイシスやセラピスも、このように新しい時代の人であるということになる。イシスはエジプト人に文字を教えた神である。そこで彼はエジプト人の知識の古さを主張する人々を批判し、エジプト人が「その教師であるイシスから文字を習ったのは二千年を上まわらなかった前のこと」にすぎず、従って「エジプトの学の古さについて根拠のない推測をたてて弁を弄するのはまったく無益なことである。」<sup>24)</sup>と断じている。アウグスティヌスにとって「地上の国」で最も古いのは、アブラハムの時代に既に第2代国王ニヌスが統治していたアッシリアであり、ついでギリシアの諸王国であった。そしてエジプトは、さらにその後によく文字を所有するに至った、後発国と位



置づけられているわけである。

以上、アフリカヌスからアウグスティヌスまで各々の年代学とエジプト史に関する議論を大ざっぱに見てきた。ヨセフスらのユダヤ人護教家たちも含めてそこで共通に見られたことは、これら教父たちが常に念頭においていたのはギリシア人とローマ人であり、いずれも彼らに対してキリスト教（またはユダヤ教）の「古さ」を論証することに、議論の最大の重点を置いていたことである。エジプト史の古さの問題は、とりわけエウセビオスに見られたように、意識されなかった訳ではない。しかし、エウセビオス自身がその問題の解決に徹底して取り組まなかったことにも現れているように、彼らの意識の中ではエジプト史の問題は、なお二次的な問題でしかなかったと言える。しかし、二次的問題にすぎなかったとはいえ、エジプト史の問題はこうしてそもそも「普遍史」の出発点から、いわば喉の奥に突き刺さった骨のような難問として存在していたのである。

中世にはいると、ヨーロッパ人はエジプトとは直接の関係を持たなくなった。そのなかでエジプトに対する知識や関心も、ローマ時代の人々とは変化せざるをえなかった。ヨーロッパとエジプトの関係を古代から近代まで追求したモレンツは、中世における両者の関係について、「ヨーロッパ大陸のキリスト教化した人々たちがエジプトに出合ったのは、なによりも第1に聖書の伝承とそこから派生した物語でであった。」<sup>25)</sup>と述べている。そしてアルファベットや暦などがエジプトの遺産であることを彼らが忘れていたように、エジプト文明は、中世においてはいわば「伏流」として流れていたに過ぎないと特徴づけている<sup>26)</sup>。実際中世ヨーロッパ人には、ピラミッドについてすら実態とかけはなれた考え方が見られる。ヴェネツィアの聖マル

コ寺院のドームにある11-12世紀のモザイクでは、それは「創世記」にある、エジプトで宰相になったヨセフが飢饉に備えて建てた穀物倉庫とされている<sup>27)</sup>。1300年頃に製作された、中世を代表する『世界図』の「ヘレフォード図」でも、ナイル川の右岸に大きな一棟の倉庫が描かれ「ヨセフの穀倉」と注記されている。他方、ピラミッドは描かれていない。またヨーロッパ人が直接観察できたエジプト人の文化遺産には、ローマにオベリスクがあった。これについても1500年頃になってもなお、ヴァチカンのオベリスクとカピトルのオベリスクは、それぞれカエサルとオクタヴィアヌスの墓碑と信じられていたと伝えられている<sup>28)</sup>。

では「普遍史」においてはエジプト史はどのように扱われていたであろうか。いまこれを「聖書に基づくキリスト教世界史としては最も完成されたもの」<sup>29)</sup>とされるオットー・フォン・フライジングの『年代記』（1146）で見よう<sup>30)</sup>。結論は簡単である。彼はエジプト史の問題を深刻にはとらえていない。本書の副題「二都論」の名称でもわかるように、彼はイエルサレム＝「神の国」、バビロン＝「地上の国」の対立・闘争の過程として人類史をとらえている。これは言うまでもなく、アウグスティヌスの歴史観を彼がその歴史叙述の基本として受け入れていることを示している。実際の記述を見ても、古代史では最初のバビロンとしてアッシリア、第2のバビロンとしてローマを位置づけ、これと「神の国」との対立を軸に歴史が構想されている。さらにエジプト史に係わる記述を見ると、イサクの死がアッシリアの第10代国王パレウス、アルゴス第3代国王アピスの時代であり、このアピスがエジプトに渡ってセラピスとなったという指摘も、アウグスティヌスの『神の国』そのままの言葉で記されている<sup>31)</sup>。アウグスティヌスは、先にもみたように、エジプト史の古さの

問題をエウセビウスのように重要視していなかった。そのアウグスティヌスを継承したオートーが、エジプト史についてその古さを問題とすることがなかったことは、当然と言えば当然でもある。このように中世においては、上で見たように、一般的な状況としてエジプト文明はそこでは「伏流」でしかなく、従って当然エジプト史への関心も薄く、そしてそれを反映して「普遍史」自身においてもエジプト史の古さの問題など意識されることがなかったと言えるであろう。

## (2) 「普遍史」の危機とエジプト史

「普遍史」が16世紀にはいると危機の時代を迎えて「年代学論争」の時代を迎えること、その原因が、一つはルネサンスと宗教改革のなかで聖書の批判的研究が進展したこと、他は大航海時代のなかでヨーロッパ世界が拡大し、「普遍史」の狭小な「世界」が打破されたことに求められること、これらについては、「年代学論争」の内容とともに既に発表した拙稿で述べておいた<sup>32)</sup>。この点については一般論はさけ、ここではただ、「年代学論争」の一局面としてのエジプト史の問題のみに絞って検討していきたい。またその際、マネット以外では、特に問題となるのがヘロドトスとシチリアのディオドールスのエジプト史記述であるが、二人のえがくエジプト史の構造についても、ここで触れておきたい。

さて、中世ヨーロッパにおいて「伏流」として流れていたエジプトの遺産が、改めて日の目をみるのはルネサンスの運動においてであった。だがエジプトの「再生」がルネサンスのなかで行われたということは、またその「再生」のあり方をも規定した。すなわち、イタリアにあったオベリスクなどの遺物によるのではなく、古典期の作家研究のなかからエジプト史が「再生」してくるようになった<sup>33)</sup>。エジプト史研

究は、古典としてのヘロドトスやシチリアのディオドールの著作研究と結び付いて、言わば副産物として発生してきたわけである。しかし「副産物」とは言え、それがもたらした問題は「普遍史」にとっては極めて重大なものとなっていく。

こうした観点から、まず注目しなければならないのはヘロドトスである<sup>34)</sup>。ヘロドトスを「歴史の父」と呼んだのはキケロであるが、しかしヘロドトスは古代においては必ずしも高い評価を受けていたわけではなかった。既にツキュディデスが「物語めいて」いるという批判を行い<sup>35)</sup>、さらにツキュディデス流の同時代の政治史叙述が主流となった古代では、空間的にも時間的にも遙かに離れた対象を、しかも聞き取りに基づいて語るヘロドトスの作風は、むしろ批判の対象とされたのである。実はキケロの『法律論』第1巻冒頭にある上の言葉も、「歴史の父ヘロドトスにおいても、…無数の物語(fabulae)が含まれている」という文章に出てくる言葉なのである。そしてルネサンス時代の人文主義者たちがヘロドトスに接するようになったときも、彼らは最初古代以来の「物語作者=嘘つき」といった評価を受け継いだ。ヘロドトスの著作は15世紀前半までにビザンツ帝国からイタリアにもたらされ、またラテン語訳も15世紀半ばに出されている。従って15世紀のイタリア人文主義者はヘロドトスに直接触れることができるようになったが、他方で彼らは古典研究のなかで古代人のヘロドトス批判に接しており、その結果、批判的な先入観のもとで彼の著作を読むことになってしまったのである。

だが16世紀にはいると、この状況が大きく変化した。モミリアーノによれば、「ヘロドトスはツキュディデスの攻撃から、2000年後の16世紀にいたってはじめて復権を果たした。」<sup>36)</sup>のである。16世紀にこうした転換が起こる原因につい



ては、モミリアーノは次のように指摘している。「ヘロドトス再評価の主要な原因が新たな人類学的研究にあったとすれば、宗教改革がその第2の要因となった。」<sup>37)</sup>すなわち第1の原因とは、「大航海時代」の中で世界の各地に進出したヨーロッパ人が、おのおのその地の歴史を研究し始めたが、そこでは、とりわけ新大陸では、ヘロドトスのように「聞き取り」による情報収集によらざるを得なかった。そこではツキュディデス流の、専門家による文献史料に基づく同時代の政治史など、はじめから問題とならなかった。逆にこうした状況の中では、ヘロドトスの手法とその叙述の価値が再評価されることになったというのである。また、第2の宗教改革については、宗教改革がもたらした聖書研究の隆盛のなかで、ギリシア史、オリエント史の研究がその不可欠の要素と考えられるようになり、この面からもヘロドトスの叙述が再評価されるようになったというのである。

さて、モミリアーノがあげたヘロドトス再評価の二つの原因は、筆者が「年代学論争」の原因として挙げた二つの原因と完全に重なっている。このことからヘロドトスの再評価が「普遍史」の危機とも深く係わっていくということが推察されるであろう。実際、藤縄謙三氏は「年代学論争」に言及しつつ、「十六世紀から十八世紀の間に、最も重視された古代の歴史家はヘロドトスであった。」と言われ、続いて、「しかし、そこで重視されたのはオリエント史を扱う最初の巻々のみであった。」<sup>38)</sup>とつけ加えられている。本節で問題にしたいヘロドトスのエジプト論が記述されるのは『歴史』第2巻である。それはまさにヘロドトスが当時最も高く評価され、それだけにまた最も影響を与えた記述の一つなのである。しかもそこでは、中世以来ヨーロッパでほとんど問題にされてこなかったエジプトについて、「エジプト中心主義」<sup>39)</sup>とすら評

される、エジプト文明への高い評価が行われていた。また、古代以来キリスト教徒たちが聖書に基づいて思い描いていたエジプト史とも、全く異なるエジプト史が記述されていたのである。

では、ヘロドトスが語るエジプト史はどのような内容を有していたのであろうか。それはもちろん聖書の描くそれとも、また今日のわれわれのものとも異なっている。またかつてエウセビオスが対決していた、マネトのエジプト史とも大きく相違していた。そこで論考を進める手順面での必要性からも、ここでヘロドトスのエジプト史像の特徴を簡単に要約し、あわせてシチリアのディオドーロスのそれも検討したい（表-2に両者が描くエジプト史の概要を示しておいたので、参照されたい）<sup>40)</sup>。

ヘロドトスが語るエジプト史は、その構造から言えば、大きく「神々の時代」と「人間の時代」に分けることができる。時間の下限はペルシア王カンビュセスのエジプト征服までである。ただし史料の根拠の面から言えば、今日の（マネトの）第26王朝以前と以後に別れる。第26王朝以前の時代については、「エジプト人の話してくれたことを、私の聞いたとおりに記してゆく」（99）としているのに対し、以後はエジプト人の伝承とエジプト以外の人のそれとが一致し、また彼自身が実際に見たことを語るとしているからである（147）。彼にエジプト史を語ってくれたのは、メンフィスのヘファイストス（プター）神殿の神官であった。

まず「神々の時代」について見よう。ヘロドトスは神々が人間とともに住み、「常に神々の内のひとりが主権を掌握していた」（144）時代をまず設定するが、しかしこの「神々の時代」の開始については明言していない。もともと神々のことについては「詳しく述べるつもりはない。」（4）と述べており、こうした彼の姿勢の

反映であろう。ただ、「神々の中で最後にエジプトの王となったのはオシリスの子オロス（またはホルス）で、これはギリシア人ではアポロンと呼ぶ神である。この神がテュポンを倒し、エジプトに君臨した最後の神なのである。」(144)としている。またオシリスをギリシア人たちはディオニュソスと同一視したのであるが、エジプト人によればこの神は3世代の神々のなかで最も新しい第3グループの神々に属し、それでもアマシス王の一万五千年前に産まれたとヘロドトスは伝え、さらにギリシア人がデュオニュソスを「私の世代から数えて精々千年前」(145)と考えていることを批判している。別の場所では「ディオニュソスのみならず、ほとんど全ての神の名はエジプトからギリシアへ入ったものである。」(50)とも述べており、このようにヘロドトスは、エジプト文明の壮麗さや、とりわけその「古さ」に深い印象を受け、ギリシア人の宗教や文化的活動の起源を、多くエジプトに求めているのである。

「人間の時代」の最初の王はミン(=メネス)であった。彼は、メンフィスを建設してそこにプター(ヘファイストス)の神殿を建立したが、その神官がヘロドトスの前で巻物を開き、「それによってミン以後の三百三十人の王の名を次々にあげた。」(100)のであった。このうち18名のエチオピア人、女王ニトクリスを除けば、全てエジプト人男子であったが、記すに足る事跡を残したのはモイリス湖を掘削した330人中最後の王、モイリスだけだったとのべてる。

この後セソストリスという大王が現れ、「有史以来初めて艦隊を率いて……『紅海』沿岸の住民を征服し、さらに、「大軍を召集して大陸を席捲し、その進路を阻む民族をことごとく平定した。」(102)という。ギリシア人における「紅海」はインド洋をさすから、つまり東はインド、北はトラキア、南はエチオピアを含む、アジア

とアフリカ、ヨーロッパにわたる大帝國を築いたわけである。王は各地に記念柱を建てたが、ヘロドトスもそれをシリアで見たと書いている(106)。王は留守を任せた弟がエジプトで起こした反乱を機に帰国し、これを平定して後は内政に力を注いだ。すなわち連れ帰った多数の捕虜を使役して全土に運河をくまなく張り巡らし、エジプト人一人一人に同面積の方形の土地を与え、年貢を課して国の財源を確保したと述べている。こうして王はエジプト内政の基礎も作り上げたと言うのである。セソストリスという王は実在せず、またこの時代にエジプト人がインドに至る大帝國を建設したことも今日では認められていない。名前から言えば、またマネトが第12王朝第3代国王をセソストリスとして、ヘロドトスと同じ活動内容を記していることから、今日では第12王朝のセンウェスレト3世(1887-1850BC.)を、あるいは、初めて外国への遠征を行ったということから第19王朝のラメセス2世(1290-24BC.)をモデルとしていると推定されているが、多分何人かの偉大なファラオの記憶が一人に凝集されて、エジプト人の間にこのような伝承が伝えられていたのであろう。だがこれは今日の議論である。あるいは、精々19世紀以後になって行われるようになった推定である。「年代学論争」の時代においては、セソストリスに関するヘロドトスの記述がそのまま受け入れられていたことについては、後ほど見ることになる。

ヘロドトスは、セソストリス以後セトス王まで合計11名のファラオの名前を挙げて説明していくが、その中で注目すべきことは、ピラミッドを建設したファラオたちを、すなわちケオプス、ケフレン、ミュケリヌスをトロイ戦争より後のファラオとしており、これをきわめて新しい時代に置いていることである。マネトは第4王朝にしているから、エジプト人は極く古い



時代と考えていたはずであり<sup>41)</sup>、そのためこの部分は、ヘロドトスの写本を作る際に、巻物の順序を間違えて筆写したのではないかという議論も行われているほどである<sup>42)</sup>。しかし、これもまた今日の議論であって「年代学論争」の時代の議論ではない。

以上でセトス王までの、「エジプト人だけの伝えるところを記した」(147) 期間は終わる。これに続くエジプト史の最後の部分は、12の地域に分裂したエジプトがプサンメティコスにより統一されてから、ペルシアのカンピュセスによって征服されるまでにあたる。プサンメティコス(663-609BC.)は第26王朝の建設者であるが、彼の統一事業には傭兵としてイオニア人及びカリア人が大きな役割を果たした。そしてこれ以後ギリシア人がエジプトで多様な活動を展開していたので、ギリシア人の伝承も加わり、これ以後のヘロドトスのエジプト史記述も実際極めて正確になっている。この時代は聖書では「列王紀下」の時代後半にあたり、第2代のネコは、ヘロドトスではフェニキア人にアフリカ周航を行かせたファラオとして有名だが、聖書ではユダの王ヨシヤを戦死させ、これにかわって傀儡としてヨヤキムを王位につけたパロとして描かれている(22-23)。

ヘロドトスに関しては、最後に、エジプト史の年代的枠組を見ておかなければならない。「神々の時代」については明確にされていないことは既に述べた。だが「人間の時代」、すなわち初代のミン王からセトス王までは、総計で三百四十一世代であるとしつつ、その期間を次のように計算している。「三世代が百年であるから、三百世代では一万年である。さらに…残りの四十一世代が千三百四十年となる。かくして合計は一萬一千三百四十年となるが、この間神が人間の姿をとって現れたことは一度もないという。」(142) 実は彼は計算間違いをしており、

正確には11,366年8ヶ月という数字になるのだが、いずれにしろ、これは大変な数字には違いない。しかもここには「神々の時代」は含まれていないのである。「年代学論争」の時代の人々がすべてこの数値を信じたとは筆者も考えないが、しかし、ヘロドトス再評価の時代の中で、この数値の示すエジプト史の古さの問題が「普遍史」にとって極めて重いものと受け止められたことは十分に推定できると考える。

次に、シチリアのディオドールスが描くエジプト史についても簡単に見ておきたい。彼の『歴史図書館』と呼ばれる著作も、当時ヘロドトスとならんでエジプト研究の基本文献の一つとして扱われたからである。ディオドールス自身は、「ヘロドトスの発明になる物語については、……われわれはこれを排除しよう。」(69) と述べてヘロドトスに批判的態度を示しているが、しかし実際は、後でもみるように、ヘロドトスに多くを負っている。ただし他の著作からの記述を加えたり、前1世紀に自らエジプトを訪れ、僧侶たちから聞き取りも行っている。

ディオドールスのエジプト史の構造は、表-2で明らかなように、基本的にヘロドトスと同一である。もっとも「神々の時代」と「人間の時代」に大きく時代区分する点は、エジプト人自身に起因するものであろう。例えばマネト自身がメネス以前に「神々の時代」を置いていたことは先にも述べた。また、800年頃のコンスタンティノーブル大司教シンケルスもヘファイストス(プター)、ヘーリオス(レー)に始まりゼウス(アンモン)に終わる、合計12,841年間を統治した神々の表を伝えている<sup>43)</sup>。さらに、完全なものではないがプター以後、レー、シュー、ゲブ、オシリス、ホルス、トト、マアトなどの神々を順に記した「トゥリン・パピルス」も発見されているからである<sup>44)</sup>。だがカンピュセスまでを記述の対象としていること、さらにセソ

エシス(=セソストリス)、プロテウスなどのほかピラミッドの建設者たちについても、その歴史的立場の間違ひまで含めてヘロドトスそのままの記述を行っていることなどを見ると、むしろ両者には共通点のほうが多いように思われる。そしてこのことは当然ヘロドトスに基づいて叙述が構想されているからだと考えられる。もっとも、表-2に見られる両者の相違にもかかわらず、このように両者の構造が共通していることは、それはそれで「年代学論争」時代の人々には大きな意味を持ったことであろう。

ディオドールスの叙述で、今後の本稿の議論との係わりで注意しておきたいことが2点ある。第1点は「神々の時代」の中で、オシリスがインドからアジア、ヨーロッパの人間の住む全ての地域を征服し、各地に記念碑を残し、またエシスとともに全地域に農業を教えたと述べていることである。そしてセソエシスのところでも、またヘロドトスと同じ世界征服が語られている。つまりエジプト人は都合2度にわたって大世界帝国を建設したというのである。第2点はディオドールスのエジプト史の時間的枠組についてである。この点では彼のほうがヘロドトスよりはるかに短い時間的枠組を提出している。ディオドールスは「神々の時代」については18,000年間、メナス(=メネス、ミン)以後彼の時代までを5000年弱としているからである(44)。第1点は後のニュートンの記述に関係するので特に取り上げたが、大切なのはこの第2点のほうである。ディオドールスがエジプトを訪れた第180オリンピアドは紀元前60-56年に当るから、この数を加えれば彼はメネス以後イエスまでの期間をほぼ5000年としていることになる。数値としては、エウセビオスのマネット研究から導き出される、5600年という数字に近い。これはヘロドトスよりは大幅に短縮しているとはいえず、やはり前節で述べたように、「普遍史」

が与えているノア以後の時間を大きく越えているのである。

「創世記」にはエジプト人はノアの子孫ミツライムを祖とすると明記され、またその後アブラハムのエジプト入りの物語、エジプトの宰相となったヨセフとヤコブ一族のエジプト移住の物語、さらに「出エジプト記」にはモーセに率いられたイスラエルの民のエジプト脱出など、誰もが知っている有名な物語が書かれている。また、「列王紀上」には、ソロモンから逃れたハダデを保護し、ソロモン死後は遠隔操縦によってイスラエル王国とユダ王国に分裂させたエジプト王シシヤクが出てくる。この王は、さらにユダの初代国王レハベアムを攻めてイエルサレムの財宝を奪ってもある(11-14章)。これらの聖書に出てくる固有名詞はヘロドトスやディオドールスの記述には出てこない。だがもうすこし時代が下り「列王紀下」の時代になると、例えばヘロドトスもディオドールスも述べているエチオピア人のエジプト王サバコスや、上でも述べたネコは聖書にも登場してくるのである。「普遍史」の立場に立つ場合、こうした共通項を踏まえながら、聖書の記述とヘロドトスやディオドールスの記述とをどのように矛盾無く理解したらよいのだろうか。しかもそれには、どうしても「普遍史」の時間的枠組におさめなければならないという条件がついているのである。これは大変な難問と言わなければならない。前節で述べたように、エジプト史の「古さ」の問題は、すでにエウセビオスの時代から、喉元に深く突き刺さった骨として存続してきた。長い間そこに留まっていたこの骨が、ルネサンスと宗教改革とに起因する新たな潮流が思わぬきっかけとなり、ここで動き始めたのである。しかもそれは、場合によっては「普遍史」の生命を脅かしかねない、大きな危険性を持つものだったのである。




### 三. 十七・八世紀におけるエジプト史研究

「年代学論争」の時代である16世紀から18世紀までの時代において、それではエジプト史研究の状況はどのようなものだったのであろうか。もっとも、このような問いに網羅的に答えようとするのが本章の目的ではない。むしろ本章では、次章においてガッテラーのエジプト論を検討するために必要と思われる範囲内で、17・8世紀における研究状況を大ざっぱにとらえておきたい。そしてそのような一般的状況の中で「普遍史」の立場からエジプト史研究に取り組んだ好例の一つとして、ニュートンのエジプト論を検討しておくことにしたい。これら2点を見ておくことにより、18世紀後半にエジプト史研究を行っていったガッテラーをめぐる時代的状況が浮き彫りになると考えるからである。

#### (1) エジプト史研究の状況

エジプト史の研究状況の重要な一局面であるヘロドトス「再評価」については、すでに前章で述べた。そこで本節ではヒエログリフ研究を中心にみていくことにするが、実はこのヒエログリフ研究もまた、ヘロドトス「再評価」をもたらしたと同一の動きに起源を持っている<sup>45)</sup>。というのはその研究が始まったのも、古典復興の運動の中からだったからである。たまたま同じ15世紀始めにヒエログリフに関する記述を残している「古典」が2点発見され、これが人々の好奇心を集めることになったのである。一つはフレンツェ人、ポッジオ・ブラッチオリニが4世紀後半の歴史家アムミアヌスの著作断片を発見したが、そこにローマにあるオベリスク碑文の翻訳が載せられていた。また、1419年に、400年頃のエジプト人ホラポロンの『ヒエログリ

フィカ』の写本が発見され学者間にセンセーションを巻き起こした。もっともこの書物が行っているヒエログリフの象徴的・比喩的解釈は、ルネサンス時代の新プラトン主義的風潮とも結びついて、長い間ヨーロッパの学者たちを惑わせることにもなった。

16世紀に入ると、イタリア以外の地にもエジプト博物館などが現れ、エジプトへの関心が全ヨーロッパに広がっていく。こうした中でヒエログリフ研究を一步進めたのは、ドイツの都市フルダ近郊出身のアタナシウス・キルヒヤー(1602-80)である。彼はルネサンス的巨人の一人にも数えられ、「万学の師」とも言われたイエズス会士の学者であるが、彼の多岐にわたる活動の中一つにエジプト研究があった<sup>46)</sup>。彼はヒエログリフで書かれた言語がコプト語に保存されていると洞察し、『コプト語の先蹤あるいはエジプト語』(1636)という、ヨーロッパで最初のコプト語文法書を著した。後年『エジプト語復元』(1644)を著すが、本書は18世紀においても学界における基本書の地位を保っていた。彼の真の目的はヒエログリフの解読であり、この面ではヒエログリフのは水を表すものと考え、コプト語で水はMOOYであるから、このヒエログリフの音はmであると推論している。もっともこの正しい結論はある意味では偶然の結果で、キルヒヤーのヒエログリフ解読は結局失敗に終わった。エジプト人が神から授けられた深遠な知恵をヒエログリフから読み取ろうとする当時の新プラトン主義的な神秘的・象徴的解釈に、彼自身も余りにも深くとらわれ過ぎていたからである。この点ではオベリスクの碑文を歴史的文書であると主張したライブニッツのほうが正しかった。しかしライブニッツは、古代エジプト語とコプト語との関連を主張するキルヒヤーに反対した点では誤っていたのだが<sup>47)</sup>。また当時の風潮を示す他の例としてニュ

ートンを加えてもよいであろう。彼は一方で、後に述べるセソストリス王以前のエジプトの「テーベ王朝、エチオピア王朝の頃の記録はヒエログリフで行われた。」<sup>48)</sup>と述べるが、他方で、「ダビデ以前に使用されたものとしては、アブラハムの子孫たちを除いて、いかなる民族にも記述するためのものとしての文字の例は見いだされない。」<sup>49)</sup>と主張し、文字の発明者を「アラビア・ペトラと紅海の沿岸に住んだアブラハムの子孫」に求めている<sup>50)</sup>。ニュートンは宗教、天文学などの学術活動、文字の発明などを全て「アブラハムの子孫」に求める考え方を持っていた。だがこれは彼の「普遍史」の全体的構想とも係わっている主張であり、それについては後に述べるとしたい。そしてここではニュートンもやはり、ヒエログリフを「記述するためのもの」ではないと考えていたことを確かめるにとどめておきたい。

18世紀にはいると、イギリスのウォーバートン(1698-1779)のように、ヒエログリフの神秘性や象徴性を否定し、実用的な文字と考える人々も出てきた。ジョセフ・ド・ギーニュは、「カルトゥッシュ」についてその内部に書かれた文字は王名を表すものだろうと正しい指摘を行っている。他方キルヒャーの失敗も人々に大きな印象を与えていたようである。モレンツによれば、ヴィンケルマン(1717-68)が「18世紀に共通の立場」をその晩年に次のように表明している。「ヒエログリフの解明はわれわれの時代には無駄な試みであり、それは物笑いの種になるだけである。キルヒャーがその著『エジプトのオイディプス』で書いていることで事実属するものは、彼の極めて深い学識にもかかわらず何ひとつない。」<sup>51)</sup>ヴィンケルマンは、本稿のテーマとしているガッテラー(1727-99)とは10歳しか離れていない世代の人である。そしてヒエログリフ解読の歴史では大きな功績を残したも

う一人のドイツ人、すなわちオリジナルな碑文の集成や、碑文にある絵と文字との区別、左右のどちらからでも自由に書かれていることの発見等によって大きな貢献を行ったカルステン・ニーブール(1733-1815)は、ガッテラーからいえば弟子筋の世代に属している。というのはニーブールが登場するのは、ガッテラーのゲッティンゲン大学の僚友ミハエリスがアラビア半島へのデンマーク探検隊を組織したとき、その一員として選ばれたことが契機となっているからである<sup>52)</sup>。

## (2) ニュートンのエジプト論

上のようなエジプト研究の一般的状況の中で、それではエジプト史と「普遍史」はどのように関連づけられるようになったのだろうか。その一例として本稿ではニュートンのエジプト論を紹介することにしたい。ニュートンの『改定古代王国年代学』(1728)<sup>53)</sup>は彼の死後出版されたものだが、死の直前まで筆を加えるなど、本書は晩年の彼が最も関心と努力を注いだ作品である。本書をここで問題とするのは、「科学革命」を代表する人物としてのニュートンの歴史観そのものへの興味もある。だが彼の主張をめぐって、当時これを擁護するイギリスの学者たちと、批判するフランスの学者たちの間で国際的な論争が戦わされており、その論争自体もまた、18世紀前半までの古代史研究の雰囲気を与えることになるからである。しかも18世紀前半は、後で述べるガッテラーもその歴史研究に一学徒として携わり始めた時代であり、彼もまたニュートンの本書を重要な参考文献として研究しているからである<sup>54)</sup>。

ニュートンの世界史像は、一言で言えば典型的な「普遍史」であった<sup>55)</sup>。本稿でとりあげる『改定古代王国年代学』と、結局彼が公表しなかった論考『ダニエル書と聖ヨハネの黙示録の預言



についての研究』(1690年頃)<sup>56)</sup>の2著を統合すると、彼の世界史の全体像が明かとなる。すなわち、まず前者では、叙述自体はノアの洪水からアッシリアまでが主要な対象となっているが、当然アダムからノアまでの人類史が前提とされており、したがって本書によって天地創造からアッシリアまでの人類史が扱われていることになる。そして後者では、これに続く新バビロニア、ペルシア、ギリシア、ローマの四世界帝国の時代が扱われている。こうした叙述の構造は、古代ローマ時代に成立した「普遍史」そのものとも言えないが、やはり一種の「普遍史」である。というより、彼の議論の目的は、彼の生きた17世紀から18世紀初めにかけての時代のなかでなお「普遍史」を擁護することだったのである。

まずこの点を聖書の二つの預言書の研究について見てみよう。ここで注意すべきは、第4の帝国である「ローマ」について、古代ローマのキリスト教徒たちとニュートンとでは、内容が異なっているということである。古代ローマ時代のキリスト教徒たちにおける「ローマ」は、まさしく彼らの生きた現実であるローマ帝国をさしており、これが滅びるときは同時に人類史の「終末」であると考えられていた。これに対しニュートンにおいては、「ローマ」は古代ローマ帝国だけでなく、さらに「神聖ローマ帝国」をも含む概念となっているのである。そして、この事態を既にダニエル書とヨハネの黙示録が予言していることの論証が、本書のテーマの一つとなっているのである。「ダニエル書」の7章では、「第4の国」は10本の角をもつ恐るべき獣として描かれ、それは「全地を食らい尽くし、踏みにじり、打ち砕く」(7-23)とされている。ニュートンはこれを、古代のキリスト教徒同様、ローマ帝国と考える。だが、「ヨハネの黙示録」の解釈に進むと、ニュートンと古代キリスト教

徒の相違が明らかとなってくる。周知のように、「ヨハネの黙示録」には3種類の、しかし似た姿の獣が幻に現れてくる。まず7つの頭と10本の角をもつ「赤い竜」(12章)が現れ、次いで同じ姿の「獣」が海から、また2本の角を持つ「獣」が、地から上がってくる(13章)。そして最後に、やはり7つの頭と10本の角をもつ「赤い獣」が「大淫婦」を乗せて現れる(17章)。また、この「赤い獣」と「大淫婦」が滅ぼされたとき、「終末」を迎えることになると予言されている。ここからニュートンは、「ダニエル書」では「第4の国」を示す獣一頭で示されているローマ帝国が、「ヨハネの黙示録」では、その歴史的段階に従い、「赤い竜」、「獣」、「赤い獣」の3頭の姿で示されていると解釈する。すなわち、彼はこの最初の「赤い竜」は統一時代の古代ローマ帝国を象徴するとし、次いで2頭の「獣」が現れるのはローマの分裂を示すもので、このうち海から上がった獣はラテン人の帝国(西ローマ帝国)、陸から上がった獣をギリシア人の教会をさす(東ローマ帝国と結合)と考えた。そして最後の「赤い獣」とはフランク人のローマ帝国をさしており、「大淫婦」とはその皇帝と「姦淫」を繰り返しているローマ教皇だと解釈するのである。つまりこのようにしてニュートンは、古代のローマ帝国と神聖ローマ帝国をともに「ダニエル書」の「第4の国」として括り、そのことによって「普遍史」の四世界帝国論の枠組が、彼の時代においてなお有効であることを示そうとしたのである。

上の議論がニュートン生きた「現代」における「普遍史」の有効性を示すための議論であるとするれば、『改定古代王国年代学』の目的は、「古代」におけるその有効性を論証することであった。そしてここで最大の問題となっているものこそ、本稿のテーマであるエジプト史の「古さ」の問題なのである。そこで、以下ではやや立ち

入って彼の議論を見ていくことにしたい。

ニュートンは、まず、古代王国の年代学研究について5つの原則を立てている。「自然の行程に、および天文学、『聖書』、歴史の父ヘロドトス、歴史自身に一致すること」(8)がそれである。まず聖書との一致が原則とされていることで、彼の年代学が「普遍史」擁護のための年代学であることが確認される。また「歴史の父ヘロドトス」が挙げられている理由は、まさに第1章で述べたヘロドトス「再生」の時代の中で、ニュートンも思考を展開しているからである。そして残りのうちの2点がニュートンに独自なものといえるが、中でも「天文学」こそ彼ならではの議論であり、同時にその年代学の鍵ともなったものである。この「天文学」が動員されるのは、具体的にはアルゴナウテース遠征の年代決定のためである。英雄イアーソーンを中心とするこの遠征譚には遠征時の星座の記述が伝えられているが、ニュートンは伝説を検討してこの時初めて天球儀がキロンとムーセウスによって作られ、その時に春分点が白羊宮中心に置かれたはずであると推定する。他方ニュートンが『プリンキピア』で数学的証明を与えたように、春分点は「歳差運動」によって星座に対して黄道上を72年で1度逆行する。春分点が白羊宮中心からどれだけ移動したかは天体観測によって実測すればよいから、その数値から春分点に中心が置かれた年代が逆算できるということになる。もう一つの原則である「自然の行程」との一致とは、王位在位年数に関するものである。これはギリシアやローマの王国時代については王名表や王家の系譜が伝えられているが、その年数が不明であったり王位在位年数が不自然に長すぎるものが多いため、これを修正するためにニュートンが持ち出したものである。これについては彼はソロモン以後のユダ王国の例、キュロス以後のペルシア、ウィリアム以後

のイギリスやフランスの諸王など、年数の明確な王たちの在位年数を計算して「自然の行程から言えば、王位在位年数は平均18年から20年」(52)という結論を出している。そしてエジプト人以来の、3世代で100年という数値とともにこれを利用して、諸王国の成立年代や存続年数を推定しようとするわけである。

さてこれらの諸原則によって、それではどのような年代が決定されていくのであろうか。まず第1にアルゴナウテース遠征の年代が確定される。「天文学的計算に自然の行程による王位在位年数についての先の計算を加味するなら、それらすべてからわれわれはアルゴナウテース遠征はソロモンの死後に行われたと、最も蓋然性が高いのは死後43年と安んじて結論することができる。」(95)ソロモンの死後43年は、紀元前937年にあたる。この年号は、第1回オリンピックが開かれたとされる前776年以前の年号としては、天文学によって裏打ちされた唯一の絶対的年号である。そこで第2の結果として、ニュートンはこの紀元前937年という年号を定点として、これに「自然の行程」その他の諸原則を加味しながら、後で述べるエジプト史をはじめギリシア史等の様々な年号を決定していくのである<sup>57)</sup>。例えばギリシア史では、トロイ戦争はイアーソーンたちの一世代後の英雄たちが行った戦争であるから紀元前904年、また「ヘーラクレイダイの帰還」(ドーリア族のペロポネソス征服)は4世代後の事件であるから前825年等々。そしてこの結果、全体としてギリシア史は大きく短縮された。エウセビオスと比較してシキュオンやアテネ、アルゴスなどのギリシア人の王国の建国は1000~500年近くも、またローマの建国も125年間短縮されて、それぞれ前1085年、627年という年号が与えられている。こうしてギリシア史、ローマ史は、全体としてかなり新しい時代に移されることになった。



本稿のテーマであるエジプト史は、彼の年代学によってどのような姿を取ることになるのだろうか。ニュートンはまず次のように彼のエジプト史研究の課題を設定している。「古代エジプト人はアンモン、オシリス、バックス、セソストリス、ヘラクレス、メムノンら諸王の、東はインドから西は大西洋に至るその巨大で長命な帝国を自慢しており、また虚栄心からこの帝国を世界そのものより何千年も古いものとしている。そこでこのエジプトの年代記を、エジプトの出来事と同時代のギリシア、ヘブライの事件とを比較対照することによって、正すことにしよう。」(191)あからさまに言えば、伝統的な「普遍史」で示される人類史の枠組に比べると天地創造以前にまで逆上ることになってしまうエジプト史を、枠組にあうように短縮しようということである。そしてニュートンがそのための鍵として注目したのは、引用文にある、エジプト人がかつてインドから大西洋に至る大帝國を築いたという彼らの伝承であった。ヘロドトスとマネトがセソストリスについて伝え、また、ディオドールスがセソストリスとオシリスについて伝えている大帝國のことは、前章で紹介しておいた。そしてそれらの伝承の内容が互いに酷似していることも紹介しておいた。この大帝國を巡る議論がニュートンのエジプト論の、まさに要石の役割を果たすことになるわけである。

ニュートンの結論から先に紹介すれば、それは「オシリス、バックス、セソストリスの3名は、実は同一のエジプト王であり、それはシシャクに他ならない。」(193) というものである。この結論を論証するためにニュートンは様々な伝承を検討していく。中でも重視される根拠は、先に触れた征服事業や弟の反乱による帰国、帰国後の内政の整備などといった伝承内容の酷似ということ、それは結局同一の事件を様々な王名と結びつけたに過ぎないと考えられることを

主張し、まず3名のエジプト王は、結局同一人物であるとする。さらにこれを聖書に出てくるシシャクと同一視するについては、「エジプトを支配した牧羊王（ヒュクソス）を追放した時代以前には全エジプトが共通の王を戴いたことがなく、シリア、インド、小アジア、トラキアを支配した王はシシャク前にはなく、さらに聖史がこの王以前にいかなるエジプト王がパレスチナを征服したことも認めていないからである。」(193以下)と述べている。結局決定的根拠は聖書に求められているわけである。そしてこの結果シシャク（＝オシリス＝セソストリス）は、エジプト史ではヒュクソスやアモシスの後、聖書では「列王紀上」(11～14章)に登場する、ユダ王国のレハベアム王時代に置かれることになった。そしてニュートンによればこのシシャクの時代がエジプト史の画期となった。すなわち彼はエジプト史をこの時期を境に「神々の時代」と「人間の時代」に大きく二分するのである。これはヘロドトスやディオドールスに共通する時代区分でもあり、そして二人がいずれも「神々の時代」の最後にオシリスの子ホルスを置いていることに対応している。

まず「神々の時代」についてのニュートンの記述を見てみよう。本書の歴史の出発点はノアである。大洪水直後は「ノアとその息子たちの統治のもと全人類はカルデアに住んでいた。」(186)彼らは、ニムロデのバベルの塔建設という神に対する反逆によって、ペレグの時、定められた地に別かれていった。このとき彼らは各地に「ノアとその子孫によって統治され教えられてきた法、習慣と宗教を携えていった。」(187)こうしてエジプトが出發することになる。明示されてはいないが出發点がミツライムに置かれていることは疑いない。アブラハムのころは大洪水後間もない頃ゆえ、まだ地上の人口も極めて少なかった。彼がエラムの王ケドラオメルか

らのロト奪還に「訓練した家の子三百十八人」<sup>58)</sup>で成功したのは、当時の人口規模を示すよい例である。またヤコブとともにエジプト入りしたのは「合わせて70人」<sup>59)</sup>だったが、エジプト脱出時には「女と子供を除いて徒歩の男子は約60万人」<sup>60)</sup>であった。ところがこの数に対し、エジプトの王は「この民は、われわれにとって、あまりにも多く、また強すぎる。」<sup>61)</sup>と言って恐れている。従ってエジプトの人口もまだまだ少なかったといえる。また王国も成立したが、初期の伝えられる王たちについては、「それぞれエジプトの数ヶ所に別れ、その下に幾らかの小王国を従えていたに過ぎなかった。」(244)モーセの時代までは、エジプトはまだこうした分裂状態が続いていた。続いてヨシュアがカナンを征服したとき、カナンを追われた人々がエジプトに流入し、下エジプトに建国した。これが「牧人」=ヒュクソスであるが、彼らはセソストリスの祖父に当るアモシス王によって再びエジプトを追われ、カナンに逆流してくる。これがサウルの時代にペリシテ人が強大化した原因である。他方エジプトはこのアモシス王以後統一に向かい、アンモン王を経て、シシャク=セソストリスの時に大統一を完成し、さらに大西洋からインドに至る大帝国となる。彼は死後オシリス、あるいはバッカス、ヘラクレスとして神格化される。またエジプト人の宗教は、この時代から次第にノアの頃の純粋性を失って異教的偶像崇拜へと転落した。かくして同じく死後神格化された彼の子ホルスで、「神々の時代」が終わることになる。最後に一つ付け加えると、ここでニュートンが「神々の時代」という場合、それはこの時代の王たちが神格化された形で伝えられているという意味であって、実際はあくまで人間が統治した時代であるとニュートンは考えている。

これに続く「人間の時代」をニュートンはメ

ネス=アメノフィスから出発させる。彼はメンフィスを建設し、また下エジプトで起きた反乱を鎮圧した。この時混乱を避けてダナオスがエジプトからギリシアに移住したが、彼によって伝えられた造船技術によってアルゴ船が建造されたのである<sup>62)</sup>。しかもアルゴナウテース遠征はエジプト人の対外支配権に打撃を与え、以後、エジプト人が固有の地に引きこもるという結果を生み出すことになった。このメネス以後については膨大な王の人数が伝えられている。だがニュートンは、「記録すべき事業を行わなかった王を削除し、また行動が記録されたり、エジプト支配の壮麗な記念碑を残したりした王のみを数えるという作業を、ヘロドトスとともに行う。」(245)と言う。作業の結果メネス以後に存在が認められた王は、「神々の時代」のほうに移されたセソストリスを除き、モイリス、ピラミッド建設者のケオプス、ケブレン、ミュケリヌス以下ヘロドトスが名を挙げた諸王のみである。従って以後はカンピュセスのエジプト征服まで、ヘロドトスと同じエジプト史が語られることになる。とはいえ、メネス即位を紀元前946年としてこれらの諸王が位置づけられているのだから、時間的枠組のほうはヘロドトスのそれを大きく短縮していることになる。これはヘロドトスが伝えるメネス以後の330名の王たちを、行動の記録がないという理由で、モイリスを除いて一挙に抹殺してしまった結果である。

以上がニュートンのエジプト論の概要である。ヘロドトスが「再生」し、同時にエジプト史の古さが当時大きな問題となっていたことは先に述べた。この「普遍史」の危機の中で、ニュートンは一方でエジプト史の枠組やメネス以後のエジプト史記述ではヘロドトスに最大限に依拠しながら、ただしその時間的枠組については「自然の行程、天文学」に、そして決定的には聖書によって大幅に短縮したのである。エジ



プト人はノアの宗教や法を受け継いで歴史的に出発し、長らく小王国の分立状態を続け、さらにはダビデ以後文字や天文学を受け入れた後発の民族とされた。ピラミッドも、ヘロドトスに従って新しい時代のものとされた。エジプト史は、文化的・政治的に、むしろヘブライ人の歴史より新しものとされた。こうしてニュートンはエジプト史の古さを否定し、再編してそれを「普遍史」の枠組に収めたのである<sup>63)</sup>。

最後に、ニュートンのこの「普遍史」の歴史的位置について触れておきたい。上でのべたように、ニュートンは聖書によって人類史を叙述した。具体的にはノアの大洪水以後人類が世界に拡散し各地で王国を建設する過程を、ヘブライ人が文化的かつ政治的先導者となって発展するものとして描いた。エジプト、ギリシア、アッシリア、ローマはいずれもヘブライ人に比べて後発の民族と位置づけられている。そしてその後、人類は新バビロニア、ペルシア、ギリシア、ローマの四つの世界帝国を経て「現代」に至っているとニュートンは考えている。このように彼の「普遍史」は時間的には「現代」までの全人類史を包含している。いやそれだけでなく「普遍史」が常に持っていた性格として、「終末論」的世界観をも合わせ持っている。というのは、ニュートンは「第7の封印」が解かれたときにローマ帝国が分裂し、さらに第5のラッパが鳴らされたとき、「サラセンのカリフ」<sup>64)</sup>が現れ、第6のラッパが鳴らされたときに現れたのが「トルコ帝国」<sup>65)</sup>であるとしているからである。ということは、あとは第7のラッパによって「終末」がもたされるのを待つばかりという時代に、ニュートンは生きていくことになる。そしてその終末の年も、明記はされていないが、彼の記述を総合すると紀元2015年以後と計算されるのである<sup>66)</sup>。このように彼の歴史叙述の背後には「普遍史」特有の時間があるわけだが、

他方、空間的広がりの方から見ると、それは古くはアッシリア、ペルシア、またサラセン帝国、「現代」ではトルコを含んだ記述がなされている。逆に言えばそれは中国や新大陸を含んでいない。しかしそれは「普遍史」の伝統的な空間は全て覆っているとはいえる。先に「普遍史」の危機の原因として、エジプトの問題に係わってくるルネサンス、宗教改革の運動のほかに、もう一つ、大航海時代のなかで古い「世界」の狭小性が明かとなったことを挙げておいた。このもう一つの問題のほうはニュートンの「普遍史」にはまだ波及していないと言える。その意味で、ニュートンの「普遍史」は古い型の「普遍史」に属するとも言える。ただし「古い」とは言っても宗教改革以後の「普遍史」という意味である。なぜなら、ローマ論の所で見たように、彼はローマ教皇を「大淫婦」と呼んで「赤い獣」たる神聖ローマ帝国とともに滅ぼさるべきものとしているからである<sup>67)</sup>。すなわち彼の「普遍史」は、このプロテスタント的「普遍史」のうち、大航海時代がもたらした問題にまだ直面していない「普遍史」なのである。

彼の世界史記述は、今日から見れば「合理主義者の壮大な夢想」<sup>68)</sup>としか言えないであろう。だが、『改定古代王国年代学』を巡る当時の論争を見ると、また別の側面が見える。というのは、彼の議論に対して主としてフランスから批判の声があがったが、その批判から当時の考え方がよく伺えるからである。例えばアルゴナウテース遠征の年代について、年代が新しすぎることに、またその根拠となる文献批判においてニュートンは誤っている等々の批判の声があがったが、しかしアルゴナウテース遠征が歴史的事実であったかどうかについては、だれも疑っていないのである。またフランスではボルテール、そしてイギリスの多くの学者たちがニュートンを擁護したが、これにはナショナリスティックな感

情も混入していたかもしれない。しかし擁護の論陣を張ることができたということ自体は、ニュートンの議論は決して時代の共通認識から見て突飛なものではなかったことを示していると考えられる<sup>69)</sup>。ニュートンは、彼の年代学の原則の第5番目に「歴史自身に一致する」ことを挙げていた。今日から見ればこの一致は実現していない。しかし彼の時代の共通認識の中で見れば、必ずしも一致していないとは言えないのである。先程ニュートンの歴史叙述を「古い型の普遍史」と言ったが、この意味では、それはニュートンに生きた時代における現実的世界史叙述でもあったのである。

また「古い型の普遍史」とは言っても、そこには「新しさ」が見られることもつけ加えておかなければならない。まず第1点は天文学を年代決定に利用するという方法である。この点については多言を要しないであろう。もう一点はニュートンが『改定古代王国年代学』における全ての年号に「キリスト前 (BC.)」を使用している点である。大きな影響力を持った年代学者で「キリスト前」を初めて体系的に使用したのはイエズス会士ペタヴィウス (1583~1652) であるといわれる。しかし彼は「創世紀元」による年号と必ず併記する形でこれを使用した。ニュートンも未公開の手稿では「創世紀元」も使用しているから、また彼の記述した歴史が「普遍史」であることから、彼も決して「創世紀元」を否定しているわけではない。だが、すくなくとも公開された書物で、徹底して「キリスト前」のみで年号を記したものとしては本書は極めて早い一例であろう。そしてこの点では19世紀以後の年号表記を彼は先取りしていることになるのである。ケンブリッジ時代のニュートンを「最後の魔術師」<sup>70)</sup>と呼び、「片足は中世におき、片足は近代科学への途を踏んでいる」<sup>71)</sup>と述べたのはケインズであった。歴史研究者とし

てのニュートンについてもまた、筆者はこのケインズの評価は当たっていると考ええる。

#### 四. ガッテラーの四種類のエジプト史叙述

ガッテラーがゲッティンゲン大学に招聘され、世界史記述に取り組み始めたのは1759年、彼が32歳のときであった。その最初の成果として世に問うたのが『普遍史教科書』(1860)であるが、これを含めて、以後彼が四種類のそれぞれ枠組の異なる世界史叙述を行っていったこと、そして大枠としては最後まで「普遍史」のそれにこだわったが、しかし内実から言えばその過程でつぎつぎと「普遍史」に固有な要素を否定していき、それによって近代的「世界史」への橋渡しとなったこと、以上の諸点については別稿で論じた<sup>72)</sup>。ここでは上の全体的な彼の歩みがエジプト史研究にどのように現れているのか、また逆に、エジプト史研究が彼の歩みにどのような影響を与えたかに焦点をあてて見ていくことにしたい。

##### (1) 『普遍史教科書』(1860)

本書はガッテラーの研究活動の出発点となった著作である。書名は「普遍史」という名称を冠しており、事実ペタヴィウスに依りつつ創世紀元で年号が記され、またアダムとエヴァから叙述が開始されている。しかしノアの洪水以後の時代になると「各国史」の形式をとり、フェニキア、バビロニア、アッシリア、ペルシア、ギリシア、ローマなどのほか中国、日本の歴史も叙述される。このようにアジアの諸国を取り込んだ点、「四世界帝国」の図式が消えている点で、伝統的な「普遍史」とは異なる形式を持っている。他方、このように並列的に記述される国々については、時間的枠組はまちまちで、また相互関係も有機的に関連づけられておらず、



全体としてまだ理論的構成が行われていない。こうしたことから本書を、彼がこの後に展開していく世界史叙述の、素材収集の段階と位置づけることができる。

エジプトについてはメネスからアレクサンドロスのエジプト征服までの歴史と宗教、政治組織、社会、宗教、文化などが記述されている。そしてこのエジプト史についても、上で述べた全体的特徴が全て当てはまる。もちろんエジプト史と係わるギリシア史の出来事やヘブライ人の歴史もここで記述されるが、しかし「世界史」におけるエジプト史の位置づけについては考察されていないからである。また「素材収集の段階」ということに関して言えば、以後に著された3種の世界史叙述で変わるのは、エジプト史の位置づけ、枠組、与えられる年号などのほうであって、問題とされる具体的な歴史的事実に関しては、ほとんど変化がないからである（表-4参照）<sup>73)</sup>。

本書のエジプト史記述の特徴を簡単に見ておきたい。まずエジプト史は次のように大きく4段階に時代区分される。

第1段階：「メネスからアマシスまでの最古の歴史（1809～2453）。」；2175～1549BC.

第2段階：「アマシスからブサンメティコスまでの歴史（2453～3313）。」；1549～671BC.

第3段階：「ブサンメティコスからカンピュセスに敗れたブサンメニトスまでの歴史（3313～3459）。」；671～525BC.

第4段階：「ペルシア人支配下の歴史（3459～3652）。」；525～332BC.

この時代区分はヘロドトスとディオドールスを彼なりに総合して成立したものである。それは、時代区分の指標となっているアマシスはディオドールス、ブサンメニトスはヘロドトスから採用されていることにも現れている。また実

際の記述を見ても、両者のそれを併記したり組み合わせたりした叙述が大部分を占めている<sup>74)</sup>。

従ってここでは特に上の点以外は注意すべき内容はないとも言えるが、ただ第1段階に関して1点だけ押さえておきたいことがある。それはメネスに関するガッテラーの記述である。「メネスは多分ノアの息子ハム、あるいはハモンであり、彼にギリシア人が後にジュピターの名を与えたのであろう；あるいは彼は聖書が伝えていないハムの息子であって、彼が少し後にその兄弟のミツライムに下エジプトの支配権を与え、自らは上エジプトの支配権を保持したのかもしれない。」(246f.)ギリシア人はエジプトのハモン（アモン）をゼウスと同一視していた。ガッテラーはこのハモンをハムにつなげ、そのハムあるいはハムの息子にメネスを重ねようとするのである。この時代のガッテラーは聖書の記述に何ら疑いを抱いていなかった。従ってエジプト人は必ずハムの子孫でなければならなかった。そうした彼の態度が、このような強引な議論に現れているのである

## (2) 『普遍史序説』(1771)

ガッテラーは上の著作で得た素材を整理することにより、本書で彼の最初の体系的な世界史叙述を行った<sup>75)</sup>。本書もやはり「普遍史」の名称を冠していることわかるように、歴史理解の根本は聖書に置かれ、従って年号もペタヴィウスによる創世紀元で記されている。他方人類史を大きく4期に分け、その第2期と第3期、創世紀元1809年における諸民族の形成からアメリカ発見までの時代を、大きく「八大諸民族体系」の興亡・対立する時代ととらえた。そしてエジプト古代史は、このうち「ペルシア的諸民族体系」の中で叙述されている。すなわち、大洪水以後各地で成立した諸民族の一員としてエジブ

ト人が成立はするが、それが世界史に登場するのはペルシアに統合され、ペルシア人を頂点としたひとつの「諸民族体系」の一員となってからであると位置づけられているのである。

エジプト史研究の内容を見ると、この時期にはマネト研究を本格的に行い、その中でエジプト史の「古さ」の問題に正面から取り組んでいる。そしてその結果、上で見たエジプト史とはその枠組が一変しているのが大きな特徴である。この研究で最も大きな問題はマネトの31の王朝の位置づけと、メネスからアレクサンドロスまでの31の王朝がエジプトを統治したとされる期間、すなわちアフリカヌスの伝える5371年間と70日、エウセビオスの5268年と8ヶ月という数値をどう扱うかということである<sup>76)</sup>。他方ヘロドトスについては、これも前章で述べたが、ミン(メネス)からセソストリスまでの、伝えられている330名というファラオたちの数と、セトス王までの合計で11,340年間という数値をどのように考えるかということである。しかもこの段階でのガッテラーが依拠していたペタヴィウスの年代学は、それがヘブライ語聖書による計算であるために70人訳聖書より大きく期間が短縮されてしまい、諸民族が形成される時点(1809年)からアレクサンドロスがエジプトを征服した3652年まではたったの1743年間しかないのである。

ガッテラーが用意した解決策はわれわれには耳新しいものではない。それは既にエウセビウスの「多分何人も王たちが同時に統治した」という考え方、あるいはニュートンの、初期の王たちが「それぞれエジプトの数ヶ所に別れ」て統治していたという考え方である。これをガッテラーは彼のエジプト史再編の一原則とし、「全て同名の王朝は一つの特異な国王集団を成している。」(304)と表現している。マネトは31の王朝全てについてその首都を明記していた。

ここでいう「同名の王朝」とは同じ首都名で呼ばれる王朝、例えば第9, 12, 13, 17, 18, 19, 20王朝を指す。テーベ(ディオスポリス)を首都としている王朝を「ディオスポリス朝」の諸王国とし、さらにそれらを「一つの特異な国王集団」と考えるというのである。そしてこれらは全てその名称で呼ばれる地域を支配する地方的王権であって、そこに根拠を置いた全国的王権ではないと考えるのである。マネトによれば、下エジプトのヒュクソスの王朝等を除けば、第20王朝まではほとんどがメンフス、ティニス、テーベのいずれかを首都としていた。従ってガッテラーの考えでは、この期間エジプトは基本的には三国時代がずっと続いたことになる。しかもヘロドトスがエジプトの統一を口にするのはサイス朝のプサンメティコス時代になって初めてであるとの理由で、ガッテラーはエジプトのこの諸王国分立の時代を第26王朝のサイス朝まで延長するのである。エウセビオスやニュートンの考え方を彼はこうして徹底した形で適用し、エジプト史を再編しようと試みたわけである。確かに、事実かどうかの問題を別にすればこれは興味ある一つの試みではある。ほとんどの時代が三国時代だったとすれば、アフリカヌスやエウセビウスから出てくる数値は何とか上の1743年間に収めることができるからである。また、ヘロドトスの330名の王と11,340年間という数値も、今度はマネトによれば解決する。というのは、マネトの記録する王の数を加算していくと、第18王朝まででほぼ330名に達するからである(ここからガッテラーはセソストリスをマネトが伝える第19王朝初代のセトスと同一視する)<sup>77)</sup>。またヘロドトスの伝える膨大な年数も、マネトの伝える年数に置き換えれば、なんとかうまく辻褄をあわせることができたからである。彼はこのようにエジプト史の基本的枠組を、統一時代はサイス朝やペルシア人支配時代



のみとし、それ以前は全て諸王国が分立していた時代とした。そのうえで、その枠組の中でマネト、ヘロドトスとディオドールス、さらに聖書に記述された諸事件、諸王の位置づけを行い、エジプト史を再編したのである。

その結果はどのようなエジプト史となったのであろうか(詳しくは、表-4を参照されたい)。まず最初に「神々の時代」が置かれる。神々や半神たちが統治した時代をマネトが伝えていることは前にも紹介したが、シンケルスの伝える15柱の神々について、これを全て「家父長」としたうえで<sup>78)</sup>、「10名の家父長は大洪水以前のものとして、またこれに続く5名の父祖たちは、ペレグの時の起こった人類の拡散までの時代におけるエジプト人と理解することができる。」

(293f.)という。エウセビオスとは少し内容は異なるが、基本的には同様な理解である。その根拠が示されていないのも、また同様である。ペレグ以後にエジプトに現れた古代エジプト人の祖も、もちろん聖書によって説明される。「エジプト人はミツライムの子孫であり、従ってハム族に属する。」(286)

「人間の歴史」の開始についてはマネトもヘロドトス、ディオドールスも一致している。ガッテラーもメネスから開始し、メネスが統治を開始した年はペタヴィウスに従って創世紀元1809年とする。ただしメネスはテーベ朝、ティニス朝の建設を同年に行ったばかりでなく、また少し遅れてメンフィスを建設してメンフィス朝の開祖ともなったとしている。そしてこれ以後3王朝鼎立の時代が途切れずに続くとしていることは、上にも述べたとおりである。さらにこのような基本的構造の上で、エジプト史をめぐる諸事件が配置されていく。例えばアブラハムがエジプトに現れるのは第3王朝末期、ヤコブがエジプト移住したのは2237年で、「ヨセフが宰相だったのは牧羊王(ヒュクソス)の時代で

はなく本国人の王、それも第4王朝のメンフィス朝の王の時であった。」(310)<sup>79)</sup>モーセに率いられたイスラエル人のエジプト脱出はメンフィス朝が第4王朝から第6王朝に変わった直後、2453年とされている。ギリシア史との関係では、ケクロプスが2401年、ダナオスが2509年にそれぞれギリシアに亡命し、それぞれアテネ、アルゴスの王となった。またトロイ戦争は2790年に始まるが、このころのエジプトではメンフィス朝の後裔であるヘラクレオポリス朝のプロテウス王が統治していた。エジプトではこの王の後、ランプシニトスを経てピラミッドを建設したケオプス、ケフレン、ミケリノスの三名の王が続くが、しかしこの時も上エジプトにはテーベ朝が存続していた。このようなエジプトの分裂状態に終止符を打つのがプサンメティコス(3313年)であるが、しかし間もなくエジプトはペルシアの支配下に組み込まれてしまうことになる。

以上がガッテラーが描くエジプト史の概要である。彼は「ここまでの労多き探求に依拠すれば、エジプト史に秩序と関連と光とをもたらすことが容易になる」(314)と言いきっている。確かに当時のエジプト史の基本文献であった聖書、ヘロドトス、ディオドールス、マネトの記述全てを、従って当時エジプト史について知られていた諸事実を全て巧妙に組み込んでいる。しかも最後のマネトはニュートンも敬遠した難物であり、これをも取り込んだエジプト史を叙述して「普遍史」の枠組の中に組み込んだのであるから、ガッテラーのこの自信もうなずけないわけではない。

彼のエジプト史を今日の立場から批判しても無意味であろうが、そうしなくとも、このエジプト史には様々な問題があることに気がつく。まず同一人物が第1, 3, 11王朝という三王朝の開祖であること自体が不自然だし、しかもこ

の三つの王朝が、同一人物を共通の祖としながらなお相互に孤立した地方的王権の状態を続けていくことも不自然である。エジプトを大統一し世界制服事業を遂行したとされるセソストリスについては、「エジプト全土に一人支配を実現した」(305)が、しかしヘラクレオポリス朝は滅ぼさず、これを臣従させただけであると強弁されている。またピラミッドの建設のような大事業を、一地方王権が実現できるのであろうか。さらに「創世記」では、ヨセフに対してパロが「わたしはあなたをエジプト全国のつかさとする。」(41-41)と述べており、明らかにここではエジプト全土が一人のパロを戴いている。しかしガッテラーは当時はヨセフが仕えたメンフィス朝以外に、なおティニス朝、テーベ朝が存在していたとしているのである。これらの不自然さはすべて、プサンメティコス以前のエジプトを分裂時代とする彼の基本構想そのものに起因している。だが他方マネットは全ての王朝の存続年数を記録しており、その数値を生かしながら創世紀元1809年から3652年までの期間に31王朝を全て配置するには、この構想によるしかなかったのである。すなわち「普遍史」に無理やりエジプト史を組み込むこと自体に、全ての問題の根本的原因があったのである。

### (3) 『世界史』(1785)

ガッテラーは先の著作で構築した「普遍史」の構想を本書では捨ててしまい、かわって文化史の発展によって時代を6段階に区分しなおした<sup>80)</sup>。また聖書によってしか描けない時代を「伝説的歴史」と呼んでこれに一定の距離を置くようになった。しかもこれまでの著書で使用してきた「普遍史(Universalhistory)」という言葉にかえて「世界史(Weltgeschichte)」の語を使用するなど、全体として啓蒙主義的色彩が強くなった。またこの時期になるとそれまでの聖書

の記述を文字通りに信ずる追隨的な態度を改め、批判的に扱うようになった。とはいえ聖書の記述を否定するのではなく、批判的に扱った上で記述を合理化して擁護することが目指されているので、これを筆者は「批判的合理化」という言葉で特徴づけておいた<sup>81)</sup>。その代表的な例は、モーセ五書は「エホバ伝承」、「エローヒム伝承」など、二人または三人の人間の手になる書物の集成であるとし、この立場からノアの大洪水の記述を読み直し、大洪水は実はインド北西部で起こった局地的洪水に過ぎず、そこでは確かにノア一族が箱舟で助かったが、他の地域には大洪水に関係なく生き残った人々が生活を続けていたと考えるようになった。ただしこれはノアの大洪水を否定する議論ではなく局地的洪水であるとすることによって、かえってそれを歴史的事実として合理的に説明しようとしているのである。だがこうした新たな要素が登場する一方で、「普遍史」の要素もまだ大きな役割を果たしている。「批判的合理化」によって洗い直した上でではあるが、やはり聖書に基づく世界史が目指されている。またガッテラーは本書でも変わらず、年号は創世紀元による年号を使用している。もっともその年号についても、これまで使用してきたペタヴィウスの年代学を捨て、イエス紀元1年を4182年とするフランクのシステムを採用した。つまりノアの大洪水からイエス生誕までを従来より198年間延長したのである。このように、依然として伝統的な「普遍史」の要素が基礎に据えられてもいるので、本書を「普遍史」の枠組内での啓蒙主義的世界史とすることができよう。

エジプト史は人類史第2期の「モーセからペルシア支配までの世界史」のなかで主として扱われているが、また重点は文化の記述なのであるが、ここではその第1節「民族」のうち、アフリカの項目のなかで叙述されるエジプト史概



観の部分を見ることにしたい。ガッテラーはここで、ペルシアの支配を受ける前のエジプト史を次の7時代に区分している。

1. 三国鼎立時代；1809～2212年，403年間。
2. メンフィス朝単独支配時代；2212～2415年，203年間。
3. ヒュクソス，またはフェニキア人牧羊王の時代；2415～2699年，203年間。
4. 文化全盛時代；2699～3184年，485年間。
5. 最初の対外戦争と立法者の時代；3184～3450年，266年間。
6. 混乱期；3450～3538年，88年間。
7. サイス朝単独支配時代；3538～3666年，128年間。

先の『普遍史序説』のエジプト史と今回のそれを比較しすると、マネトの31の王朝をメンフィス朝、ティニス朝、テーベ朝などを設定して配置していくという方法は踏襲している。だが、決定的に違うのは2度の統一時代を新たに設定したことである。最初は「メンフィス朝単独支配時代」だが、実質は第4王朝後半と第6王朝前半の115年間である。そしてこの時代にヨセフが宰相となったとしているから、これは明らかに聖書の記述との矛盾を解消するためである。ガッテラーはこの単独支配時代をティニス朝、テーベ朝の一時的断絶の導入で作り出した。第2の統一時代はほぼ「文化全盛時代」にあたり、第19王朝後半から21王朝初期までの実質388年間である。ここでは先に第9王朝のヘラクレオポリス朝であるとされていたピラミッド王朝が、今回は第20王朝のテーベ朝に変更されている。またここにピラミッド王朝が置かれていることで明らかなように、このような大事業の遂行という事実を説明する必要から、統一時代が導入されたのである。

だがここで大きな問題が生じた。この388年間でどのようにしてひねり出すかという問題であ

る。第1の統一時代はメンフィス朝以外の2王朝の一時的断絶で説明した。だが今度はメンフィス朝自身の断絶で説明しなければならない。『普遍史序説』では3312年まで一切断絶無しとして、やっとペタヴィウスの年代学が許す時間の枠に収めたのだが、この断絶期間をそのまま挿入するとエジプト史全体が388年拡大されることになり、上の3312年という枠からその分だけはみ出してしまうことになるのである。この問題を解決するため彼はまず第9王朝について、以前はアフリカヌスによって409年間としていたものを、今回はエウセビオスが伝える100年間に置き換えた。これで309年間を取り戻したことになる。しかし先に最初の統一時代を設定する際にティニス朝、テーベ朝の断絶期間を導入した関係でここに第5王朝の滅亡がずれ込んでくるから、その期間を相殺すると浮かすことができた年数は309年間ではなく241年間にしかない。つまりどうしてもまだ388年には147年間が不足するのである。どうすればよいか。その解決策が年号体系の変更であったと筆者は推定している。すなわち上の147年間に他の諸王朝の位置を補正する年数少々を加え、ノアからイエスまでの期間を198年間延長したのである。こうして本書がそれまでのペタヴィウスの年代学からフランクのそれに移行したのには、実はエジプト史の「古さ」の問題が決定的原因となったのである<sup>82)</sup>。この事実は極めて重要な意味を持っている。「普遍史」の最大の原則は聖書に基づく世界史記述である。先の著作でプロクルーステースならぬガッテラーは、まさにペタヴィウスのヘブライ語聖書に基づく年代学というベッドに合わせ、エジプト史を切り詰めた。しかし、今回はベッドの役割を果たしているのはエジプト史のほうである。そしてガッテラーはそのベッドに合わせるため、「普遍史」のほうを叩き延ばしたのである。もちろんこの新たな年代

学も聖書に基づいてはいる。ガッテラー自身も、本書によってより正しい「普遍史」の記述を与えたと考えていた。だがわれわれにはガッテラーと同じに考える義務はない。すなわちエジプト史の「古さ」は、ここでは明らかに「普遍史」の年代学的基礎を動揺させているのであり、またこのことを通じて「普遍史」そのものが、全体的危機に直面しているのである。

さて、ガッテラーの新たなエジプト史叙述の他の側面も見ておこう。上でもみたように、エジプト史の開始期におかれる15柱の神を、「天体であろう。」(219)と考えるようになった<sup>83)</sup>。またノアの大洪水がエジプトに及んでいないとするようになっていることに伴い、すでに「原住民」がいたところにミツライムの子孫たちがやってきて、しかもその「原住民」に溶け込んでいったと考えるようになっている<sup>84)</sup>。メネスを「エジプトにおける最初の人間の王」(219)とすることは変わらないが、他方「歴史全体が要請することは彼を1809年頃までさかのぼらせることであるが、しかし彼をノアの子孫とする必要は全くない。」(同)とも述べている。そしてメネスが開いたのはティニス朝であるが、「多分テーベとメンフィスの国王はメネスの息子か縁者であろう。ほぼ同じ頃(2084頃)、アブラハムのエジプト旅行が行われた。」(220)としている。ヨセフが宰相になったのは最初の統一時代、メンフィス朝第4王朝においてであった。ヨセフの死後ヒュクソスが侵入したが、モーセが育てられたのは「ヒュクソスのファラオの一人の宮廷」(221)であった。ケクロプスに率いられたエジプト人がギリシアに亡命したのはこのヒュクソスの専制支配が原因であったが、モーセに率いられたイスラエルの民が脱出したのも同じ原因からであった。だがエジプト人の苦難も、「出エジプト」が行われた2699年で終わる。というのは彼らの後を追ったヒュクソスは、聖書

にあるように、王以下全員が滅びてしまったからである。この後エジプトは「文化全盛時代」を迎え、テーベ王朝の単独支配の下でモイリス湖の掘削やピラミッド建設などが行われた。なおガッテラーは、ヘロドトスなどが伝えるモイリスとセソストリスを「ヒエログリフで書かれた記念碑の誤読の産物」(222)であるとして、本書ではその存在を否定している。このあとエジプトは再び分裂時代にはいる。その中で「国外諸国の争いに介入した最初のファラオ」(224)としてシシャクに触れたり、さらにプサンメティコスによって3度目の統一が行われることを記述していくが、これ以上は省略してよいであろう。ただ最後に注意しておきたいことは、このようにエジプト史における諸事件の位置づけとその年号を一変させると、必然的に世界史全体の年号も再編成を余儀なくされるということである。というのは上でも触れたように、エジプト史はギリシア史、オリエント史と様々な糸で結びついており、そのためエジプト史の年号だけの手直しでは事が済まなかったからである。先ほどエジプト史の「古さ」が「普遍史」全体を大きく動揺させたこと述べたが、それはエジプト史の変更が、このような大規模な全体の書き直しに結びついていくからである。

#### (4) 『世界史試論』(1792)<sup>85)</sup>

最後の著作となった本書でガッテラーは、またしてもそのエジプト史叙述を変えた。これを変えた背後には世界史叙述の構成そのものの変化がある。本書は一面で『普遍史序説』の立場が復活したという側面を有している。使用される創世紀元はペタヴィウスのそれに復帰しているし、時代区分がアッシリア、ペルシア、マケドニア、ローマといった「四世界帝国論」を思わせる政治的指標によっているからである。しかし実際の内容を見ると、伝統的「普遍史」を



構成していた諸要素はわずかに痕跡程度にしか残されていない。第1期にアダム＝ノア期が設定されているものの、これは「伝説的歴史」とされ、全861頁のうち2頁しか与えられていない。ノアの大洪水は局地的洪水に過ぎなかったし、従って洪水の被害を被らずに生き延びた人々が各地に存在し、従って旧約聖書の説くノアの系譜も人類全体のそれではなく、ノア族の特殊な系譜に過ぎない。上にアッシリアからローマまでの国々が時代区分の指標として復活したといったが、実際の内容を見るとモンゴル、中国やインドなどをはじめアラビア人やトルコ人の記述も行われており、伝統的な「四世界帝国論」とは構成原理そのものが違ってきている。しかも各章では圧倒的な比率を文化史の記述が占めており、この点でも「普遍史」とは全く異なった内容を有しているのである。こうした諸点からは、先にガッテラーが『世界史』の時点で聖書に対する「批判的合理化」の立場に転化したことを述べたが、本書執筆までに彼の批判的研究が一層推し進められたことが伺えるのである。そしてなお「普遍史」の枠組は残しながらも、実質上はその自己否定が大きく進展したという意味で、筆者は本書を近代的世界史の試みの一つと考えている

エジプト史については、「アッシリア＝ペルシア期」とされる人類史第2期のうちで、「アッシリアの諸民族」の一員と位置づけられている。そこではペルシアに支配される3468年までのエジプト史が、次の4段階に区分されている。

1. 最古の、大部分は不明の時代；モーセ、ダナオスまで（2453年および2472年）。
2. 文化全盛時代；モーセとダナオスから2986年まで。
3. 対外戦争と混乱の時代；2986～3340年。
4. サイス朝単独支配の時代；3340～3468年。

これを先の著作『世界史』と比較すれば、第3、4期は全く同じであるが、以前には4つの時代を設定していたサイス朝以前に関し、今回は「最古の、大部分は不明の時代」と「文化全盛時代」の2期にまとめていることになる。

変わったのは時代区分だけではない。記述内容そのものにも大きな変化がみられる。最も大きな変化は、メネスをはじめセソストリスやランプシニトスなど、一連の古いファラオたちを「ヒエログリフの像の誤読の産物」（17）として否定してしまったことである<sup>86</sup>）。さらにマネトの記述やヘロドトス、ディオドールスなどの古い時代に関する多くの記述も否定してしまったことである。だが何故このようなことが起こったのだろうか。それについては、ヒエログリフ解読についてヴィンケルマンが「物笑いの種」とすら述べるほど、18世紀後半にはこれを絶望視する空気が強かったことを先にみた。ガッテラーの上のような判断には、多分こうした当時の時代状況が影響を与えたに違いない。またヒエログリフの解読にこのように否定的態度をとることは、そこから進んでヒエログリフの文書によって書き記された歴史の否定につながっていったと考えられる。すなわちヘロドトスとディオドールスの、エジプトの神官が巻物を見せながら伝えてくれたとするエジプト人独自の伝承も、またマネトすらも、そこでは否定の対象になってしまったのだと考えられる。こうした結果ガッテラーは、『普遍史序説』と『世界史』であれほどの労力を費やしてきたマネトの31王朝の位置づけの問題を、本書では一切廃棄したのであろう。その上で聖書とギリシア人の伝えるエジプト史、及びピラミッドなど歴史的遺物による疑いのない事実のみに依拠して、改めてエジプト史を構築し直そうとしたのであろう。ヒエログリフの文書による記述を否定した以上、これらに立ち戻るほかはないからである。

もつとも、この作業は一面でガッテラーの「批判」の発展の結果であるといえる。先の『世界史』では「批判」の作業は主として聖書について行われ、それがまだギリシア史やローマ史、エジプト史などにはほとんど向けられていなかった。今回はそれが、言わばこうした「各論」の分野にまで広げられているからである。とはいえそれは、今日から見れば明らかに行き過ぎの「批判」である。ただし行き過ぎとはいえ、しかしまたそれなりに当時一般的であった考え方に基づく行き過ぎと考えられるのである。だがまた他面で、この行き過ぎは「普遍史」の擁護に利益を与えるという、別の結果にも結びついている。マネトの31王朝やヘロドトスの古代エジプトに関する具体的数値を廃棄すれば、その「古さ」を厳密に規定する必要がなくなるからである。『世界史』で198年間も年代の枠組を拡大した彼が本書で再びペタヴィウスの年代学に立ち戻ることができたのは、これによってエジプト史の年表をもう一度「折りたたむ」ことができたからである。すなわち「批判」の進展は、ガッテラーにおいては「普遍史」の枠組の擁護とも結びついたのである。

それではエジプト史は具体的にどのように記述されているのであろうか。まずエジプト人の起源を聖書とつなげる記述はなく、ミツライムとの関係は議論されていない。上で述べたようにメネスについても、「最初のファラオの名前、業績、統治年代は不明である。」(17)とその存在を否定している。だがこれに続いて「しかしアブラハムの遙か以前から長い間すでにファラオたちが統治していた。」(同)と述べて、その「古さ」は承認している。古いとは言っても、エジプト史は全体として1809年から始まる「アッシリアの諸民族」という枠組の中で叙述されているから、「古さ」の上限はこの1809年ということにはなるであろう。続いて最初の確かな事

実として、2023年にアブラハムがエジプトのメンフィス朝時代にこの地を訪れたが、当時はおティニスとテーベにも王国があったらしいと言い、「しかしヨセフが2220年に宰相になったときは、メンフィス王朝は疑いもなく全エジプトの単独支配者であった。」(同)という。ヒュクソスの侵入と専制支配が原因でケクロプスが2426年に、モーセに率いられたイスラエル人が2453年にエジプトを出国し、またこの年ヒュクソスも滅んだ。続いてダナオスも2472年、ギリシアに向かった。以上の「最古の、大部分は不明な時代」に続くのが「文化全盛時代」である。そしてここでは書物が書かれ、天文学、星占い、冶金術などが発展し、またモイリス湖の掘削やオペリスクなどが建設されたこと、「ピラミッドの建設が……トロイ戦争前後の極めて近い時代に行われた」(17f.)ことが記されている。そしてファラオたちの名前のほうは、ここにも、また特にピラミッドについて項目を立てて記述している別の場所(S. 69f.)でも挙げられていない(次の第3期以後の時代についてはここでは省略する)。

最後にいくつかの年号をここで紹介したのは、先に本書でガッテラーがペタヴィウスの年代学に立ち戻ったと言ったが、それは『世界史序説』の年号体系に機械的に後戻りしたことを意味する訳ではないことを示したかったからである。両者を比較すると、モーセの出国の年代は同一であるが、ケクロプスのそれは前回では2401年、ダナオスのほうは2509年としていたのである。ガッテラーはこのように、年号の決定にはその都度細かく注意を払い、またその都度多大な労力を費やしているのである。

#### 四. 小 結

エジプト史の「古さ」の問題は、そもそも「普



「普遍史」が成立した時から存在していた難問であった。マネトをはじめとするエジプト人の主張するエジプト史は、聖書の示す人類史の時間的枠組を遙かに凌駕する長大なものだったからである。だがこの難問は、エウセビオスなどの少数の人々をのぞけば、古代ローマ、中世を通じて表面化することはなかった。しかしルネサンスによるマネト、ヘロドトスやシチリアのディオドールスの「再生」を通じて、また宗教改革以後の聖書研究とも結びついて、新たにエジプト史の「古さ」の問題が浮上してきた。そしてこの問題はいわゆる「年代学論争」の時代の重要な問題となった<sup>87)</sup>。

こうしたなかで、主としてヘロドトスとシチリアのディオドールスの伝えるエジプト史を念頭に置いてこの問題に取り組み、エジプト史の古さを否定したのがニュートンであった。彼は天文学や経験的事実をもととする判断などを主張してあらたな装いをこらしつつ、しかし根本的には聖書に基づいてエジプト史を大きく切り詰め、自身が信ずるプロテスタント的普遍史の枠内にこれを収めたのである。ただ、ニュートンの「普遍史」そのものはまだ中国やインド、アメリカ大陸などの問題と対決していない「普遍史」であって、こうした意味では彼の議論は17世紀から18世紀始めにおける一つの解決策でしかなかった。

本稿のテーマはガッテラーのエジプト論が、彼の世界史叙述の変遷とともに変化する過程を分析し、その意味を考察することであった。彼が登場するのは18世紀後半であり「年代学論争」が最後の局面を迎えているときであった。そうした時代にあつてガッテラーは、ニュートンが考察の対象としなかったマネトのエジプト史をも念頭におきつつ、エジプト史の問題と取り組んだのである。

だが問題は簡単には解決しなかった。最初彼

はエジプトの統一時代を紀元前7世紀の第26王朝以後とし、これ以前を全て分裂時代としてマネトの伝える31の王朝をペタヴィウスの年代学が示す人類史の枠組に押し込めた。「普遍史」の年代的枠組はこれによって守ることができたが、他方内容的には聖書の記述との矛盾が生じ、またピラミッドをはじめとするエジプトの高度な文化的活動が説明できなくなった。

次にガッテラーが行ったのは、この新たな問題を解決するために2度の統一時代を新設することであった。しかしそのために、今度は年代的枠組との間に矛盾が生じた。そこで、驚くべきことにガッテラーは、年代的枠組そのものを198年間拡大して、この問題を解決しようとしたのである。だがこれは本末転倒ではないだろうか。本来は「普遍史」の年代的枠組を守るためにエジプト史の取り組んだはずだが、ここではエジプト史との矛盾を解決するため、年代的枠組のほうをかえているからである。もちろん彼はこの新たな年代的枠組も聖書に基づいていることを主張した。だが同じ聖書に基づいているはずの年代的枠組が、このように変化するものであってよいのであろうか。否むしろ、エジプト史の「古さ」の問題が、こうした聖書に基づく年代学自体の問題性を浮き彫りにしてくれたと受け取るべきではないだろうか。少なくとも、エジプト史の「古さ」の問題が伝統的な「普遍史」を根底から揺さぶる力を有していたことを、このことがよく示しているといえよう。

最後の段階でガッテラーは再びペタヴィウスの年号体系に立ち返った。これを可能にしたのは、ヒエログリフの「誤読」という一点に根拠を置いてマネトやヘロドトスの伝えるファラオたちを抹殺するという荒療治によってであった。だがこれはヒエログリフの解読への絶望感が強かった18世紀後半の時代のなかでのみ許された行き過ぎだったといえる。そうした意味で

はガッテラーが最後の著作でエジプト史を改めて短縮し得たと言っても、そしてそれが彼なりの「批判」を通じてであるとは言っても、それはエジプト史の「古さ」の問題の真の解決ではなかった。いわば問題に蓋を被せた上で、問題解決への努力に小休止がもたらされたにすぎなかったと言える。彼の四種類の世界史叙述の変遷を全体としてみると、ガッテラーは伝統的な「普遍史」の基本的要素を自ら次々と否定し、かくて彼を通じて「普遍史」の自己崩壊が急速に進んでいた。そしてこの変遷をもたらした原因の一つがエジプト史であったことは、ここまで見てきたとおりである。だが最後の著作で改めて元のペタヴィウスの年代学体系に戻ることができたことで、あるいは上の「小休止」を得たことで、少なくともガッテラーにおいては一つの「平安」にたどりついたと感じられていたであろう。さらに彼を通じて「普遍史」も、全

面的崩壊への過程で、やはりひとつの小休止を得たということになる。

ガッテラーは1799年4月4日にこの世を去っている。ほぼ4ヶ月後の8月上旬、その後のエジプト研究を一変させる大発見が行われた。「ロゼッタ・ストーン」の発見である。シャンボリオンがこれによってヒエログリフの解読に成功するのは1822年のことだが、それ以後のエジプト研究はもはやガッテラーのそれとは別次元の研究となる。そこではヒエログリフ自身が「普遍史」の許容する時間を遙かに越えた、古い事実を語るようになるからである。そしてガッテラー自身が上の「小休止」のなかで息を引き取ったことは、極めて象徴的な出来事となった。というのは、エジプト史が「普遍史」に与えた「小休止」も、まことに束の間のものでしかなかったし、それはまた「普遍史」にあたえられた最後の平安の時となったからである。

#### 【註】

- 1) 1. 「ドイツ啓蒙主義歴史学研究 (I-1) — Johann Christoph Gatterer と世界史」『埼玉大学紀要 教養学部』第26巻, 1990年 (以下, 拙稿(1))。
2. 「ドイツ啓蒙主義歴史学研究 (I-2) — 「年代学論争」と Johann Christoph Gatterer —」『埼玉大学紀要 教養学部』第27巻, 1991年 (以下, 拙稿(2))。
3. 「ドイツ啓蒙主義歴史学研究 (I-3) — Johann Christoph Gatterer の世界史叙述における聖書の位置 —」『埼玉大学紀要 教養学部』第29巻, 1993年 (以下, 拙稿(3))。
- 2) 拙稿(2)で扱った。
- 3) H. バターフィールド, 鈴木利章, 『歴史叙述』平凡社 1988年, 95頁。
- 4) エジプト史がかかわるのはこの第1の問題である。したがって本稿では第2の問題については考察できない。
- 5) フィネガン, 三笠宮崇仁訳 『聖書年代学』岩波書店 昭和47年。また前川貞二郎, 『歴史を考える』ミネルヴァ書房, 1988年も参照。
- 6) 詳しくは, 拙稿(2)に, アフリカヌスを始めとする諸著作家の創世紀元による年号体系を一括し, 一覧表にして掲載しておいたので, 参照されたい。
- 7) ヤペテはギリシア神話に出てくる「イーアベトス」に通じており, ギリシア人は「民族表」の視野には入っている。しかしギリシア史が書かれているわけではない。
- 8) Eusebius, *Chronicon*: in *Eusebius Werke* 7. Bd. Hrsg. von Rudolf Helm, Leipzig 1913. なお, アルメニア語訳のほうは, 上の作品集第5巻に J. Karst によるドイツ語訳の形で収められている (以下では Armenian version)。
- 9) 前川, 前掲書 12頁以下。
- 10) 「カノン」については, アルメニア語訳のほうには欠損部分があり, ラテン語訳にはそれはない。両者の年号の数値は一致しないものがあるし, また人名などに相違も多々ある。特にオリンピアドの年号についてはかなりの相違がある。表にはアルメニア語訳にあるもの



を載せた。また本表は、主としてアルメニア語訳の年表を中心に、アレクサンドロスによるペルシア滅亡までを要約したものである。表にある年号のうちで、創世紀元の年号 (Ab Adam) と BC. の年号は、便宜のために筆者が計算して加えたものである。またいくつかの問題ある年号については、フィネガンの上掲書の解釈を採用した。

- 11) Manetho, *The History of Egypt*. The Loeb Classical Library, 1980.

マネトは紀元前3世紀前半にヒエロポリス神殿の高官を務めたエジプト人であり、プトレマイオス2世の求めに応じてギリシア語で『エジプト誌』を記して献じた。このマネトの原著は現存しない。しかし早くから何種類もの要約が作成され、それがヨセフスをはじめとするユダヤ人達、またアフリカヌスに研究された。エウセビオスも、本書第1部の「エジプト人」の項で、マネトの別の抜粋を採録しつつ議論を行っているのである。

- 12) Manetho, *op. cit.* p. 27f.

- 13) エジプト人が神々などが統治したとしている時代については、エウセビオスはこれらを全て人間の王たちであるとした上で、次のように伝えている。

1. 神々の統治した時代；13,900年間。

Hephaestus(Ptah)-Hēlios(Rē)-Sōsis-Cronos(Geb)-Osiris-Typhon(Seth)-Orus.

ホルス以後は血縁により Bydis (Bites) まで。

2. 半神たちの統治

第1の王朝1255年, 他系の王朝1817年, メンフィスの王朝1790年, ティスの王朝350年。

3. 死者の霊および半神たちの統治；5813年。  
(2+3=11,000年)

総計 24,900年 (正確には24,925年)

(Armenian version, p. 63f)

- 14) Armenian version より計算。

なお、シンケルスが伝えるマネト断片からは、5262年と79日という数字が出てくる。

- 15) Manetho, *op. cit.* p. 107. ただし今日ではイスラエルの民はヒュクソス時代 (1730頃~1532 BC) にエジプト入りし、第18王朝を建てたアブモーセがヒュクソスを追放した後も彼らはエジプトに留まったと考えられており、モー

セによる「出エジプト」の事件は第19王朝のラメセス2世の時 (1290BC) とされている (米倉充『旧約聖書の世界』人文書院 1989年, 38頁以下)。

- 16) Manetho, *op. cit.* p. 111.

- 17) Armenian version p. 161.

- 18) *ibid.* p. 64. なおシチリアのディオドールスも神々が統治した時代のエジプトの年数について同じような議論を行っている。そして「月」を「年」とよんだか、あるいは「4ヶ月」を「年」と呼んだという説があることを紹介している。(Diodorus Siculus, *Library of History* 60~30BC?. Loeb Classical Library 1989, Book 1. p. 83)

- 19) Armenian version p. 64.

- 20) *ibid.*

- 21) 『神の国』18-3

- 22) 同, 18-5

- 23) 同, 18-4

- 24) 同, 18-40「エジプト人の知識の古さに関する根拠のない主張について」より。

- 25) Morenz, S., *Die Begegnung Europas mit Egypten* 1968 S. 124.

- 26) *Ebenda.* S. 124ff.

- 27) *Ebenda.* S. 141.

- 28) *Ebenda.*

- 29) 兼岩正夫, 『西洋中世の歴史家』東海大学出版会, 1968年, 134頁。

- 30) Otto von Freising, *Chronicon sive historia duabus civitabus*, 1146?. Otto Bishop of Freising, *The Two Cities*. Translated by Mirow C. C., Octagon Books. INC. New York, 1966.

- 31) *ibid.* 1-14, 15. また、アルゴス初代の王イーナコスの子イオがエジプトに渡り、その地でイシスとして崇められたとする記述もそのまま取り入れられている (1-10)。

- 32) 拙稿(2)を参照されたい。

- 33) Morenz, a a O. S. 137.

- 34) 以下では、藤縄謙三, 『歴史の父ヘロドトス』新潮社, 1989年, を参照した。

- 35) ツキュディデスは『歴史』の「序文」(1-22)で、自著について、「本書は物語めいていないので、恐らく聞いて余りおもしろくないと感じられるであろう。」と述べている。古来この言葉は、厳密に検討された事実に基づき、面白さを犠牲にした自己の叙述との対比で、むしろ

ろヘロドトスの物語的性格をツキュディデスが批判した言葉と受け取られている(藤縄, 上掲書 396頁)。

- 36) Mogmigliano, A., The Place of Herodotus in the History of Historiography. in "History" 43 (1958). p. 10.
- 37) *ibid.* p. 12.
- 38) 藤縄, 上掲書 477頁。
- 39) Morenz, a a O. S. 54.
- 40) 表-2 はヘロドトス, 『歴史』第2巻から, またディオドールスについては上掲書第1巻から作成した。なお以後両書からの引用は, 全て本巻からの引用なので, 節番号で表記していく。
- 41) Manetho, *op cit.* p. 45f.
- 42) 藤縄, 上掲書 169頁。
- 43) Manetho, *op cit.* p. 15, 17.  
シンケルスが伝える表は, 次の15柱の神々である:  
エジプト最初の王朝; 11, 985年間。  
1. Hephaestus(9000年), 2. Hélios, 3. Agatodaemôn, 4. Cronos, 5. Osiris, Isis, 6. Typhon.  
半神たちの王朝; 856年間。  
7. Ôrus, 8. Arês, 9. Anubis, 10. Hêraclês, 11. Apollo, 12. Ammon, 13. Thithoês, 14. Sôsus, 15. Zeus.
- 44) *ibid.* p. 3.
- 45) 以下は主としてモレンツ (Morenz, a a O. S. 136-154.) によっているが, また, 鈴木八司, 『王と神とナイル』(沈黙の世界史2)新潮社, 1972年, も参照した。
- 46) ジョスリン・ゴドウィン著, 川島昭夫訳『キルヒャーの世界図鑑』工作舎, 1990年, に簡単な評伝とその活動が紹介されている。
- 47) Morenz, a a O. S. 147.
- 48) Newton, I., The Chronology of Ancient Kingdoms Amended 1728. p. 225. なお本書からの引用は, 本文中にその頁数を示す。
- 49) *ibid.* p. 210.
- 50) *ibid.* p. 209. 「創世記」では, アラビア・ペトラにはヤコブの双子の兄エサウを祖とするエドム人が住み, 紅海の沿岸には, アブラハムの2番目の妻ケトラの産んだミデアンを祖とするミデアン人が住んだとされている。両者はともに商業民族として知られている。  
エドム人は特にその「知恵」が聖書では強調

されていた。彼らは紅海沿岸で広く商業活動を行ったが, またヘロドトスの記述(1-1)によってフェニキア人の祖先となったとも考えられていた。

他方ミデアン人は初めてラクダによる隊商を始めた民族として知られているが, 「創世記」ではヨセフを購入してエジプトで売り払った人々として登場している。さらにモーセがヤハウェの召命を受けたのは, 彼がエジプトを逃れてこの民族のもとに身を寄せていたときであった。このモーセが授けられた「十戒」は明らかに文字が使用されているはずである。そこでニュートンは, これらの聖書やヘロドトスの記述を踏まえながら, 「文字と天文学, 大工の輸出などは, 商売の記録をとったり, 出納を記帳するため, また彼らの船を導いたりするために紅海にいた商人たちによって発明されたと考えられる。そしてアラビア・ペトラからそれらがエジプト, カルデア, シリア, 小アジア, ヨーロッパへとほとんど同時に即ちダビデがこの地を征服しその商人たちを追い散らした時に広がっていったと考えられる。」(*ibid.* p. 212)と言う。さらに科学, 宗教, 政治など全ての面で歴史をリードしたのがアブラハムの子孫だと彼は主張している。

- 51) Morenz, a a O. S. 159.
- 52) この事情については拙稿(3)に触れておいた。
- 53) 注48参照。
- 54) 筆者自身, ガッテラーがその『普遍史教科書』(1860)の中で参考文献としてニュートンの本書を挙げていることから, 本書の存在を知ったのであった。
- 55) ニュートンの世界史像について, 詳しくは拙稿「ニュートンと世界史」(『歴史科学と教育』10号, 1991年所収)に紹介しておいたので参照されたい。
- 56) Isaac Newton, Observations upon the Prophecies of Holy Writ: particularly the Prophecies of Daniel and the Apocalypse of St. John 1690? (以下では Observations)。
- 57) 表-3を参照されたい。ニュートンは生涯に1ダース以上の年表を残しているが, この資料はそのうち最もよく整理されているとして『改定古代王国年代学』に収録されたものを筆者が要約した。年号は全て「キリスト前(BC.)」で記されているが, このことの意味については後で触れる。



- 58) 「創世記」14-14。
- 59) 「出エジプト記」1-5。
- 60) 同, 12-37。
- 61) 同1-9。
- 62) 表-3の『小年代記』を書いた時期は不明であるが、その時期にはニュートンはダナオスと対立していたアイギュプトスもシシヤクと同一人と考えていた。しかし本書ではそれを改め、メネス時代に下エジプトで起きた反乱に関連させている。
- 63) エジプト史の問題ほど深刻ではなかったが、アッシリアの「古さ」も当時問題となっていた。ニュートンはこれについてもやはり聖書を決定的な根拠としてその「古さ」を否定している。彼は、聖書の中では「ニムロデ以後ブルに至るまで、われわれはアッシリアについて聞くことがない。」(269)と指摘して、「かくてまさしくプルこそ最初の征服者であり、アッシリア帝国の建設者である」(272)と述べ、その建国を紀元前790年に一挙に引き下げているからである。これも、エウセビオスやアウグスティヌス以来議論されてきたアブラハムの同時代人ニヌス(またはベルス)からサルダナパルスに至るアッシリア史を完全に抹殺し、それによってアッシリア史を大幅に短縮している。
- 64) Newton, Observations, p. 480.
- 65) *ibid.*, p. 481.
- 66) 詳しくは上にあげた拙稿「ニュートンと世界史」を参照されたい。
- 67) ニュートン自身はこのローマ教皇批判の中に、カトリック批判を越えて、さらに三位一体説そのものの批判を込めていた。ただしこのことは、戦後になって遺稿から彼がアリウス派の立場に立っていたことが明らかになってきたから言えることである。当時のニュートンにとってはこのことは隠すべき「恐るべき秘密」(ケインズ)であった。ここでは従って、ローマ教皇を「大淫婦」とすることでプロテスタント的立場を表明していると解しておくのが、当時のニュートンの望んでいた解釈ということになる。(Keynes, J. M., Newton, the Man. 1947. 大野忠雄訳, 「人間ニュートン」『ケインズ全集』第10巻, 東洋経済新報社, 昭和55年, 369頁)。
- 68) Manuel, F. E., Isaac Newton Historian, 1963. p. 49.
- 69) *ibid.* pp. 166-193.
- 70) ケインズ, 上掲書, 364頁。
- 71) 同, 370頁。
- 72) 四種類の世界史記述については、拙稿(1)で詳しく述べておいたので、参照されたい。各著作の原題は以下の通りであるが、これらの著作からの引用については、全て引用文の末尾に記す。
- Handbuch der Universalhistorie nach ihrem gesamten Umfange von Erschaffung der Welt bis zum Ursprung der meisten heutigen Reiche und Staaten, Göttingen 1761.
  - Einleitung in die synchronistische Universalhistorie zur Erleuterung seiner synchronistischen Tabellen, Göttingen 1771.
  - Weltgeschichte, Theil 1, 2, Göttingen 1785.
  - Versuch einer allgemeinen Weltgeschichte, Göttingen 1792.
- 73) 『普通史教科書』のこのような性格から表-4には本書が提出しているエジプト史像は採録していない。しかし他の三種のエジプト史叙述で扱われる基本的事実が共通であることは、表を見れば了解して戴けるであろう。なお、この表はメネス以後の時代についてのまとめであり、メネス以前の神々の時代は省略してある。
- 74) エジプト史の「古さ」の問題に係わるのは、具体的にはプサンメティコス以前のエジプト史をどのように考えるかの問題である。従って以下では原則としてプサンメティコス以前のみについて検討していく。
- 75) 人類史全体を次のように組み立てている。
- 第1期 (1~1809)。; アダム~ノア
- 第2期 (1809~AD. 5C.)。
1. 諸民族の発生。
  2. アッシリア的諸民族体系(1809~34<sup>25</sup>/<sub>46</sub>)。
  3. ペルシア的諸民族体系 (3425~3654)。
  4. マケドニア的諸民族体系 (3624~1C. BC.)。
  5. ローマ的諸民族体系 (3230~J. Chr. 5 C.)。
  6. パルティア的諸民族体系(3734~J. Chr. 651)。
- 第3期または中世 (5~15C.)。
1. 民族移動。
  2. 後期ローマ帝国。
  3. ドイツ・スラヴ的諸民族体系。

4. アラブ的諸民族体系。  
5. タタール・モンゴルの諸民族体系。
- 第4期(15~18C.)  
6. ヨーロッパ諸国。  
7. 非ヨーロッパ諸国。
- 76) なおガッターのマネト研究はシンケルスの伝える写本を通じて行っているが、その数値はほとんどかわらない。上で見たように(註14)、シンケルスによる数値は5262年と79日となっている。
- 77) マネト自身はセソストリスを第12王朝第3代に置いているのだが、ガッターはもちろんこちらは無視する。
- 78) 注43) 参照。
- 79) ヨセフが宰相のときヒュクソスがエジプトを支配していたと考えたのはヨセフスははじめ古代ローマ時代のユダヤ人たちであり、エウセビオスもそうであった。
- 80) 『世界史』(1785): 6段階に時代区分されている。  
1. 最古の伝説的歴史(2600年間)。  
A. 大洪水の時代まで(1657年間)。  
B. モーセまで(1000年間)。  
2. モーセからペルシア支配までの世界史(1000年間)。  
3. ペルシア支配からローマ人、パルティア・ペルシア人及び中国人の支配まで(400年間)。  
4. ローマ人、パルティア・ペルシア人、および中国人の支配から民族移動の時代まで(600年間)。  
5. 民族移動の時代から十字軍の時代まで(800年間)。  
6. 十字軍の時代から現在まで(約600年間)。  
また、各章は次のように構成され、政治史が背景に退いて「啓蒙」と題された文化史的記述が大部分を占めるようになっている。  
I. 民族; 1. 各民族の歴史。  
2. 啓蒙; 民族単位の文化史記述。  
II. 歴史; 1. 諸民族が関与した諸事件。  
2. 啓蒙; 時代全体の文化史記述。
- 81) 以下について詳しくは拙稿(3)を参照されたい。  
82) もう一つ中国史の「古さ」の問題が関与していると考えられる。だが、この点については別に論じたい。
- 83) これはニュートンの考えでもあった。
- 84) 「ノア一族のミツライムの子孫がエジプトに住み着く以前からいた原住民は、思考様式、言語、啓蒙及び道徳において、近東の原住民に比べすでにかなり進んでいたに違いない。」(217)と述べ、また「ノア一族は、原住民よりも少数であった場合には、たとえ支配権を持った場合においても、原住民の言語や風習を受け入れたようである。」(218)としている。
- 85) 『世界史試論』(1792)の構成  
第1期1800年間; アダム=ノア期(1~1809)。  
第2期1800年間; アッシリア=ペルシア期(1809~3600)  
1. アッシリアの諸民族(1809~3431)。  
2. ペルシア期(3431~3600)。  
第3期1800年間; マケドニア=ローマ期(3600~JC. 1453)  
1. マケドニア期(3600~3838)。  
2. ローマ期(3838~JC. 622)。  
3. ローマ=スラヴ=アラブ期(622~1037)。  
4. ローマ=トルコ=モンゴル期(1037~1453)。  
第4期300年間(~現在まで)。
- 〈各章の内容〉 I. 民族の歴史  
II. 人間の歴史  
1. 産業と分業 2. 技術 3. 科学 4. 商業と海運 5. 家族制度 6. 社会制度 7. 宗教
- 86) 「今日すでに知られていることは、ニムロデの時代にエジプト王国を建設したとされるメネス、…オシマンディアス、…モイリス、世界征服者と考えられているセソストリス、宝物倉を建築したと伝えられるランプシニトスなどは一部は確実に、他はほとんど確実に、ファラオなどではなくてただヒエログリフの誤読の産物に過ぎないということである。」(16f.)
- 87) マネトを復活させたのはスカリガーであるが、彼以後のエジプト史の古さをめぐる諸家の議論については、以下を参照されたい。  
Grafton, A. T., Joseph Scaliger and Historical Chronology: The Rise and Fall of a Discipline. in "History and Theory" vol 14, 1975).



表一 1 : エウセビオス『年代記』(アルメニア語訳を中心に)

A.Ad	A.Ab	Oi.	BC.	《ヘブライ人》《アッシリア》《シキューン》《アルゴス》《アテネ》《エジプト》	《ローマ》
0 2242			5200 2958	アダム 洪水  ベノスの息子ニヌスが インドを結ぶ全アジア を支配(52年間)。 ニヌス <sup>1</sup> 第43年 セミラミス <sup>2</sup> :バビロ ンを建設	
3184 3194 3259 3284 3344 3359 3374 3444 3454 3464 3491 3545 3609 3689	0 10 75 100 160 175 190 260 270 280 307 361 425 505		2017 2037 1942 1917 1857 1842 1827 1737 1747 1737 1710 1652 1592 1512	アブラハム誕生 アブラハムの召命 イサク誕生 アブラハム死 イサク、ヤコブ誕生 アブラハム死 イサク死(180才) ヤコブ死(147才) ヨセフ死(110才) モーセ誕生 出エジプト	イウロプス <sup>2</sup> 第22年  イナコス <sup>1</sup> :イ、 エジプトへ入信 210 <sup>1</sup> フォロネウス <sup>2</sup> — オーギュゴスの洪水 — アピス <sup>3</sup> :エジプトに 着り、セラピス廟に。 — プロメテウスの活動 —  390 <sup>1</sup> オムトボリス <sup>12</sup> 376 <sup>6</sup> クリアソ <sup>5</sup> 408 <sup>8</sup> サウルス <sup>13</sup> 390 <sup>6</sup> マティオス <sup>14</sup> 463 <sup>3</sup> トリオバ <sup>7</sup> 460 <sup>4</sup> カロプ <sup>1</sup> 488 <sup>9</sup> ケンケル <sup>9</sup> — ヘラクレス — — 528 <sup>2</sup> ダナオスの移住 — 537 <sup>7</sup> アムニクス <sup>17</sup> 519 <sup>9</sup> ケルウス <sup>15</sup> 549 <sup>9</sup> ダナオス <sup>1</sup> 529 <sup>9</sup> エリクニオス <sup>4</sup> 653 <sup>3</sup> コラス <sup>16</sup> // // // 607 <sup>7</sup> パレパルス <sup>19</sup> 593 <sup>3</sup> エポフェウス <sup>17</sup> 593 <sup>3</sup> リンナウス <sup>2</sup> 579 <sup>9</sup> パティオン <sup>5</sup> 668 <sup>8</sup> シキューン <sup>19</sup> 641 <sup>1</sup> 752 <sup>2</sup> イナコス <sup>21</sup> 706 <sup>6</sup> ペロプス <sup>1</sup> 734 <sup>4</sup> アイゲウス <sup>9</sup> 719 <sup>9</sup> パニアス <sup>23</sup> — 760 <sup>0</sup> アルゴナウテース遠征 — 696 <sup>6</sup> ラメシス <sup>2</sup> 764 <sup>4</sup> ソサルモス <sup>34</sup> // 835 782 <sup>2</sup> テセウス <sup>10</sup> 762 <sup>2</sup> アメノフィス <sup>3</sup> 832 <sup>2</sup> ラドドン 810 <sup>0</sup> タウタニス <sup>26</sup> 806 <sup>6</sup> ポリファレス <sup>24</sup> — トロイ陥落 — 812 <sup>2</sup> メステウス <sup>11</sup> 831 <sup>1</sup> 第20王朝 839 <sup>9</sup> アエネイス 860 <sup>0</sup> エリ 881 <sup>1</sup> ティネウス <sup>28</sup> 888 <sup>8</sup> 滅亡 《ラケダイモン》 881 <sup>1</sup> ティモテウス <sup>15</sup> 889 <sup>9</sup> メラントス <sup>16</sup> 841 <sup>1</sup> アスカノウス // 915 <sup>5</sup> エウリュステウス <sup>1</sup> 926 <sup>6</sup> ゴドフ <sup>17</sup> 879 <sup>9</sup> シムウイス 911 <sup>1</sup> テルクロス <sup>29</sup> // 947 <sup>7</sup> メノン:王政禁止 989 <sup>9</sup> ラオステネス <sup>31</sup> 958 <sup>8</sup> エストラトス <sup>3</sup> 913 <sup>3</sup> 第21王朝 // 993 <sup>3</sup> ラホーテス <sup>4</sup> 1143 <sup>3</sup> 第22王朝 1177 <sup>7</sup> サルダパルムス <sup>36</sup> // 1199 <sup>9</sup> 第23王朝
3729 3756 3796	545 572 612		1472 1445 1405	モーセ死→ヨシュア (モーセ五書成立) 士師記、ゴドニル エポ	528 <sup>2</sup> ダナオスの移住 — 533 <sup>3</sup> ラメシス <sup>15</sup> =アイギュプトス 641 <sup>1</sup> 第19王朝
3876	692		1325	デボラとバラク	641 <sup>1</sup> 第19王朝
3959 4019	775 835		1242 1182	トラ 832 <sup>2</sup> ラドドン 860 <sup>0</sup> エリ	762 <sup>2</sup> テセウス <sup>10</sup> 831 <sup>1</sup> 第20王朝 839 <sup>9</sup> アエネイス 841 <sup>1</sup> アスカノウス 879 <sup>9</sup> シムウイス
4084 4124 4168 4204	900 940 984 1020		1117 1077 1033 997	サムエルとサウル ダビデ ソロモン神廟造営 王政復興 《ユダ》《イスラエル》 レバナム ヤラバナム	696 <sup>6</sup> ラメシス <sup>2</sup> 762 <sup>2</sup> アメノフィス <sup>3</sup> 831 <sup>1</sup> 第20王朝 839 <sup>9</sup> アエネイス 841 <sup>1</sup> アスカノウス 879 <sup>9</sup> シムウイス 913 <sup>3</sup> 第21王朝 913 <sup>3</sup> 第21王朝
4381	1197		820	アッシリア滅亡 《メディア》 預言者たち; ホセア、 アモス、イザヤ、ヨナ アムルウス <sup>1</sup>	1143 <sup>3</sup> 第22王朝 1199 <sup>9</sup> 第23王朝 1197 <sup>7</sup> プロカス 1221 <sup>1</sup> アム-リウス 1237 <sup>7</sup> 第24王朝
4424 4448 4454	1240 1264 1270	1-1 7-1 8-3	777 753 747	— 第1回オリンピック — イスラエル滅亡	1237 <sup>7</sup> 第24王朝 1302 <sup>2</sup> ヌ <sup>2</sup> 1302 <sup>2</sup> ヌ <sup>2</sup>
4598 4610 4641	1414 1426 1457	44-3 47-3 54-2	603 591 560	ゼビキヤ ユダ滅亡・バビロン捕囚 メデア滅亡 《ペルシア》 キュロス <sup>1</sup> 1488 <sup>8</sup> カンビュセス <sup>2</sup>	1281 <sup>1</sup> 第25王朝 1325 <sup>5</sup> 第26王朝 1358 <sup>8</sup> プサンメティコス 1402 <sup>2</sup> ネコ 1343 <sup>3</sup> トルニス・ホステリウス 1375 <sup>5</sup> アンクス・マルキウス 1398 <sup>8</sup> カルキニウス・プリスクス 1435 <sup>5</sup> セルウイス 1469 <sup>9</sup> カルキニウス・スベルプス 1504 <sup>4</sup> 共和政に移行。
4681	1497	65-2	520	第2神廟再建 ダリウス <sup>4</sup> 第2年  1680 <sup>0</sup> ダリウス ペルシア滅亡	1492 <sup>2</sup> 第27王朝 (ペルシア人の支配)
4870	1686	112-3	331		1680 <sup>0</sup> アレクサンドロス
5199	2015	194-4	2	イエス誕生	アウグストゥス第43年







